
迷宮の魔王さま

井戸端 康成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮の魔王さま

【Nコード】

N1524P

【作者名】

井戸端 康成

【あらすじ】

数千の齢を生き、そして亡くなった魔王。だが彼の魂はそのままあの世へ行くことなく……。

元魔王が迷宮を舞台に繰り広げるファンタジーの開幕です！

※この度、改訂版をまた新たに投稿することにいたしました。感想で受けました指摘を生かすためです。それによりこの小説は更新を停止し、代わって改訂版で続けることといたします。

大変申し訳ないのですが、ご了承下さい。

追伸

改訂版の題名はそのまま『迷宮の魔王さま 改訂版』としたいと思います。
です。この題名で検索をかけていただければ改訂版に
辿り着けると思います。

第一話 ある魔王の死

第一話 ある魔王の死

魔界の果て、闇深き地に城がそびえていた。魔を統べる象徴たる城はすべてを威圧し、見下ろしている。高く、厚い壁は何者の侵入をも拒み、尖塔は天へと睨みを効かしていた。

その城の最深部にある玉座の間。艶やかな深紅の絨毯が敷き詰められ、高貴な空気に満ちたそこに、数え切れないほどの者たちが集っていた。その者たちは皆一様に玉座に向かって頭をたれている。その顔は虚ろでどこか悲痛な面持ちであった。その光景はなにか喪に臥しているかのようにであった。

数百もの瞳に見つめられていた玉座の主は、弱々しく息をするばかりであった。深く皺の刻み込まれた皮膚は蒼白、唇は土気色。彼に死が差し迫っているのは明白であった。しかし、未だにその青い瞳は刺すような光を保っていた。

「みな集まったようであるな」

玉座の主が口を開いた。威厳溢れるその声に、場の空気が一気に張り詰める。一切の物音がその場から排除され、無音の空間が出来上がった。玉座の主は場が静まったのを確認すると、再び口を動かす。

「もう知っていると思うが、余の命は持ってあと数刻。最後にみな顔が見たくてな。こうして集まってもらったというわけだ」

「魔王様、そんなことをおっしゃらないで下さい！」

魔王の言葉に、集まった家臣たちは動揺を隠せない。すでに知っていたことではあったが、本人から言われたのと人づてに聞いたのでは重みが違った。不安、恐怖、死への嫌悪。様々な感情が渦巻き、集まった者たちの心を揺らす。やがて、玉座の間がざわめきによって乗っ取られた。だがそれとは対照的に魔王は落ち着き払っていた。

「落ち着くのだ。余とて気分の良いことではない。数千の齡を重ねてきた中で一番嫌なことだ。だが避けられぬ、故に騒がぬ」

魔王はこの一言で場をおさめた。そして手に握っている黒光りする杖を揺らして、一人の男を呼び寄せる。男は神妙な態度で玉座へと上り、うやうやしく膝をついた。

「顔を上げよ」

「はっ！」

魔王は魔を統べる者とは思えない慈悲深い目で男の瞳をみた。男は緊張で身体を強張らせる。

「うむ、良い瞳をしておる。これから国を頼むぞ」

「ありがたき幸せ！」

男は涙で頬を濡らして下がっていった。魔王は満足げに頷くと、また別の男を呼び寄せる。そしてまた同じような行動を繰り返した。

魔王の別れの挨拶はしばらく続いた。そして、いよいよ最後の家臣と挨拶をしようとしたところで、魔王の命が尽きてきた。彼は胸を抑え、苦しみに喘ぐ。

「魔王様、大丈夫でございますか！」

「もうどうの昔に大丈夫ではない。構わんから早く最後の者よ、来るのだ」

魔王は駆け寄った家臣の手を振り払った。そして最後尾に座っている男を執拗に呼ぶ。男は魔王に早足で玉座の前に移動した。

「最後はおぬしか宰相。さあ、顔を上げるがよい」

宰相はゆっくりと顔を上げた。魔王は最後の力を振り絞り、声を出す。それはしわがれ、小さな声であったが、心を打った。

「おぬしには世話になった……。実によく余を支えてくれた。今後は王子たちを……ぐうつ……支えてくれ」

「ははっ！ 命に替えましても！」

宰相は頭を下げた。しかしそのまま下がることはなく、魔王の手を握りしめる。魔王の手からわずかずつ、わずかずつではあるが体温が失われていた。命が燃え尽きていくのが、はっきりと宰相には感じ取れた。

「魔王様……」

宰相は魔王から手を離れた。手がだらりと垂れ下がる。その身体

はもう、力を失っていた。悲しみが玉座の間に溢れ出て、嘆きの声が幾度となくこだました。

一人の偉大な魔王が今、死んだのだ。

★★★★★★

魔界とも、そこから繋がる人間世界ともまったくことなる世界にある、神秘の大陸アルゲニア。そのほぼ中心に位置する迷宮都市。今日も迷宮帰りの冒険者たちで騒がしいその街の端で、一人の男が目覚めました。

「ううつ……ここが地獄か？　だいぶ想像とは違っているが……」

男は立ち上がると、困惑したようにつぶやいた。その声はかなり若返ってはいたが、さきほど死んだはずの魔王とほぼ同一であった……。

第一話 ある魔王の死（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二話 魔王から探索者へ

第二話 魔王から探索者へ

夕焼けに染まり、昼の顔から夜の顔へと移ろうとしている迷宮都市。その裏通りを魔王はゆっくりと歩いていった。

「あの世のどこかではなさそうだな。雰囲気から言うと人間世界か？　だが余は死んだはず……」

夕焼け空に太陽が昇り、家や商店の立ち並ぶあたりの様子に魔王は思い悩む。彼の知っている限り、このような光景があるのは人間世界だけであった。

しかし、魔界から人間世界に行くのは特別な大魔法を使わなければならないし、第一彼は死んだはずだ。それらの事実が魔王の頭を悩ませていた。さらに理解しがたいことに、すでに老齢であったはずの彼の肉体は何故か若返っていた。

「……今はとにかく情報が必要だな」

魔王はそうつぶやき、一端思考を打ち切った。そして辺りを歩いて人の姿を探す。冒険者の街の裏通りには到底似合わない豪華なマントが揺れ、杖がかつかつと音を立てた。

「よう、兄ちゃん。金持ってそうじゃん？　俺達にわけてくれよ」

魔王から放たれる高貴な気配に金の香りを嗅ぎとったのか、よからぬ輩が近づいてきた。人数は三人、それぞれくたびれた革の鎧を

身につけている。大方冒険者崩れのチンピラだろう。

「余は金など持ってはおらぬ。他を当たれ」

魔王は気怠い顔をしてけんもほろろに男たちを追い返した。男たちはその態度に苛立ち、腰から獲物を抜く。

「おい、なめたこと言ってんじゃねえぞ！」

男たちはナイフをちらつかせ、魔王を威圧した。しかし、魔王は眉をひそめるだけだ。それも当然、魔王にとってこの男たちの威圧など、子犬に吠えられた程度のことにしか感じられなかった。

「金を持ってないのは事実だ。無い袖は振れぬ」

「ちいつ、なら身ぐるみ置いていけ！」

男たちは魔王に襲い掛かった。荒事には慣れているのか、なかなかの速度だ。三つの刃は滑らかな直線を描いて魔王に向かう。

しかし、その程度の攻撃が魔の頂点に君臨していた魔王に通用するはずがなかった。

「弱い者をいたぶる趣味はないが……余はやられたらやり返す主義だ」

魔王は身を翻すと、瞬く間に拳を繰り出した。右、左、正面。計三発の拳は男たちをくの字に曲げた。男たちは悲鳴すら上げずに白目を剥き、泡を吹く。

「うむ、若返ったせいかが入りすぎたな。だがまあいい」

魔王は男たちを通りの端に寄せると、そのまま歩き去ろうとした。だが、そこでふと思いついた。

「そうだな、慰謝料代わりに記憶を覗かせてもらおう」

魔王は男に近寄ると顔を上げ、額をさらけ出した。そして呪文を紡ぐ。

「ジャックイン」

魔王は目を閉じ、男の額に手を重ねた。魔王の頭に男の記憶や知識が流れ込む。膨大な量の情報に頭の中が埋め尽くされていった。

だがさすがに魔王というべきか、しばらくすると情報処理を完了し、彼は男の知識を完全に自分の物とした。

「面白い、アルゲニアに迷宮か。何者が余を導いたのかは知らぬが、感謝しなければな」

男から得た知識は魔王の興味を引いてあまりある物であった。未知の世界に未知の存在。特に、この迷宮都市に存在する迷宮は魔王を興奮させた。深い階層に潜む強大なモンスターに、彼らの残す秘宝。さらに祝福を受け、迷宮を探索していく冒険者、通称シーカーたち。これらは魔王に少なからずある好奇心をくすぐった。

魔王本人は決してそうは言わないだろうが、魔王城に時折現れる勇者と戯れたのも、彼が勇者という存在に好奇心を覚えたからである。それぐらい、彼は好奇心旺盛であるのだ。

「守るべき国もここにはない。気楽に冒険して暮らすのも悪くないな」

当面の生活方針を決定した魔王は、男の記憶にあったシーカーたちの拠点、シーカークランへと向かうことにした。だがその前に、機嫌の良くなった魔王は男に施しをしてやろうと考えた。魔王とはやはり気まぐれなのだ。

魔王は道端に落ちていた石を拾うと魔力を込め始める。石が透明な宝石のようになり、青く輝き出した。魔王は満足そうな顔をする、それを男の懷に滑り込ませる。

「良かったな。十年は餓えずに済むぞ」

魔王はそう言って笑った。彼が数分で造った宝石には、この男の稼ぎ十年分ぐらいの価値はあった。

魔王は立ち上がると今度こそその場から歩き去る。そして、周囲から奇異な目で見られつつも通りを歩き、十分ほどでシーカークランに到着した。

「ほう、ここか。神の気配がするが……致し方ないか」

魔王が目にしたシーカークランはその後ろにある神殿と半ば一体化していた。魔王は少し嫌な顔をしたが、さして気にはしない。

神と魔王の仲は悪いが、人間たちに思われているほどは悪くない。どちらかがどちらかを害したというのであれば容赦しないが、普段は互いに無関心。それに世界規模の危機に陥った時には協力したこ

ともある。ちょうど同じ建物に住んでいる仲の悪い住人同士のような関係だと思えばわかりやすい。

だから、マナーさえ守れば神殿に入るぐらい大したことでは無いだろう、と魔王は考えたのだ。そして、彼はシーカーとなるべくシーカークランへと足を踏み入れたのだった……。

第二話 魔王から探索者へ（後書き）

魔王さまの性格とかが難しいです。何か参考になる物はないでしょうか……（涙）

第三話 シーカークラン（前書き）

お気に入りが作者的に凄い伸びです。これはまさか……魔王さまのお力なのか!?

第三話 シーカー克蘭

第三話 シーカー克蘭

夕闇が深まる中、シーカー克蘭は今日もシーカーたちでごった返していた。その中に、一人の男が足を踏み入れてきた。魔王だ。

「いらっしやいませ。何のご用ですか？」

カウンターに座っていた受付嬢は魔王に、錆び付いたような営業スマイルで答えた。そしてその心の中で思う。またどこかのアホな貴族が来たのかと。

シーカーになるためにシーカー克蘭に来る貴族というのはたまにいます。そういうのはたいてい自身の腕に自信を持っていて、それを見せつけてやろうという連中だ。だが、そんな連中は普通シーカーになって三日ぐらいで、その自信を打ち砕かれ辞めていく。

豪華な紅いマントを着てこれまたきらびやかな杖をついていた魔王は、どこからどう見てもそういうアホ貴族にしか見えなかった。

「シーカーになる手続きをしたいのだが」

「はい、わかりました。……ではこちらについてきて下さい」

魔王は受付嬢が笑顔の裏に放った『場違いだ、帰れアホ貴族』というメッセージを黙殺した。というよりはそもそも気がついていない。受付嬢は仕方なく魔王を手続きのできる奥の個室へと案内した。

魔王が受付嬢に案内された部屋はとても小さな部屋だった。椅子が二つ、真ん中のテーブルに向かい合うように置いてあり、さらにその真ん中のテーブルの上には水晶球と書類が置かれている。部屋にはそれだけしかなく、またそれだけしか置けるスペースがない。

「こちらにお座りになって下さい」

受付嬢は魔王を先に手前の椅子に座らせた。そして自身は奥の椅子に座る。椅子に腰を落ち着かせた彼女は書類をぽんぽんと整え、魔王に説明を始めた。

「手続きを始める前にシーカーの義務と危険性について説明します。
……」

魔王が聞いた受付嬢の説明はかなり長かったが、その主な事柄だけを抜き出すとこうだ。

まず、第一にシーカーとなるとシーカー克蘭に税金のような物を納める義務を負うということ。このお金は月ごとに支払うもので、シーカーによって金額がことなる。収入が多い上位のシーカーほど多い仕組みだ。なお、シーカーになって最初の一月は払わなくても良いらしい。

第二に、シーカーになるとこの街から出るのが面倒になるということ。優秀な戦力であるシーカーに勝手気ままに動かれては困るからだそうで、街を出るのに非常に煩雑な手続きが必要になるのだそうだ。ちなみにその手続きには最低でも半年はかかるらしい。

最後に、シーカーたちの死亡率について。何でも初心者シーカーの死亡率は三割近くになるそうで、熟練者の死亡も良くあるらしい。

ただし、魔王はこの部分の説明をほとんど聞き流していたが。

「説明が終わりましたので、いよいよ登録作業です。まずはこの書類に必要な事項を書いて下さい」

受付嬢は魔王にペンと書類を手渡した。魔王は書類を受け取ると、必要事項をサラサラと記入していく。文字の知識はさきほどの男から得ていたし、書き込む情報は適当でもばれないと魔王は高を括っていた。

「全部記入できたぞ」

「はい、どれどれ……名前がイストリア・フランシス・フリードリヒ……」

名前の欄を見た受付嬢の顔が曇った。欄いっぱい小さな字で書かれている。覚えるのに苦労するどころか、読み上げるだけで大変だ。

しかし、ここで魔王が助け舟を出した。彼自身も名前が長すぎることは自覚していたのだ。何故自覚しているのかはつきり言ってしまうと、彼自身も思い出しながら記入したからである。

「魔王で構わん。長いからな」

「魔王ですか？ はい、わかりました。そう呼ばさせていただきますね」

受付嬢は妙な顔をしたが、何も聞かなかった。この世界にはモンスターはいっても魔族はいないので、魔王という言葉に特に意味はな

いのである。

しばらくして、受付嬢は書類に目を通し終えた。すると、水晶球に何か薄い紙のような物を差し込む。彼女は紙が奥までささったことを確かめと、魔王の方に向き直った。

「ではいよいよステータス測定です！ この水晶球に手を当ててみて下さい」

魔王は受付嬢に促されるまま、水晶球に手を触れた。水晶球は何も反応しない。受付嬢が首を捻った。だがその瞬間、水晶球が太陽のように明るく輝き出した。

「うわああ！ 何でこんなに光るんですか！！ いつもはこんな風にはならないのに！」

「そういうものなのか？」

「はい、いつもはぼんやり明るくなる程度です！ あっ、カードが出て来ましたよ！」

受付嬢は未だにチカチカとする目を擦りながら、水晶球の隙間から出てきたカードに目を通した。

すると、その顔色がどんどん青ざめていく。やがて彼女は震えながら、カードと魔王の顔を見比べた。そして次の瞬間。

「な、なんでこんな人がレベル五百もあるんですかああ！」

受付嬢の渾身の叫びがシーカークランにこだました。窓ガラスが

割れそうな程の音量だ。さしもの魔王もこの音波攻撃には耐えられなかったのか、ギュツと耳を抑える。彼の耳にキーンと耳鳴りがした。

少し後で、耳鳴りが収まった魔王。そこで彼は空気を読まないことを承知で、受付嬢に気になったことを質問をした。

「雰囲気を壊して悪いが、レベルとは何だ？　それが五百とはそんなに驚くことなのか？」

この質問に受付嬢がまた叫んだことは言うまでもないだろう。

第三話 シーカー克蘭（後書き）

なかなか話が進まない……。まだヒロインすら出てないぜ。次回、次回にはきつと登場させるのでお楽しみに！

第四話 魔王とおせっかい少女（前書き）

ようやくヒロインの登場です。

第四話 魔王とおせっかい少女

第四話 魔王とおせっかい少女

朧げな月に街が照らされる宵の口。シーカー克蘭の奥の個室では、一人の受付嬢が魔王を疲れたような目でみていた。

「えーと……はあ。レベルというのは強さの単位です。一般的には高ければ互いほど強いということになります。それがあなたの場合なんと五百！　今まで最高とされた人でも百三十程度でしたのに……。あなたは一体何者なんですか？」

「さきほどそなたに言ったような気がするが、余は魔王だ」

「いや、そういうことではなくて」

「別に余が何者であつてもそなたに迷惑がかかるわけではあるまい。気にするな」

受付嬢は言葉に詰まった。確かに、魔王の言う通りではあった。彼が何をしてきたのかなど、シーカー克蘭は知る必要はない。むしろ、無理に詮索して臍を曲げられたりしたら困る。彼ほどシーカー克蘭に貢献しそうな人材はいないからだ。

「わかりましたよ魔王さん。確かにあなたの言う通りです。ですが、あなたのレベルのことについては絶対に言いふらしたりしないでくださいよ！　混乱が起きるのは目に見えていますからね」

「余は不要なことは言わぬ質だ。言いふらしたりはせぬ」

「本当の本当にですね？」

「ああ、本当の本当にだ」

受付嬢は魔王の目をじっと見つめた。魔王もまたそれに応えて動きを止める。二人はまるで氷のようになった。

辺りが静けさに覆われた。二人は互いに互いの顔を見たまま動かない。部屋の中は空気まで動かないほど変化に乏しくなった。その状況はしばらく続いた。

「信用しましょう。はい、これがクランカードです」

受付嬢はとうとう魔王のことを信用して、シーカーの証であるクランカードを手渡した。魔王はそれを受け取り、興味津々な様子で入念に観察する。

クランカードは黒色で、表には大きな文字で魔王と書かれていた。そして裏にはたくさんの数字が書き込まれていた。攻撃、とか守備とか書かれている。魔王の能力を数値化したものだろう。だが、魔王はそれには興味を示さなかった。簡単なこと、自分の力は自分が一番良く知っていたからだ。

「良くできているな。これで登録は完了か？」

「はい、一応クランですべきことはすべて完了しました」

「ふむ、手間をかけたな。礼を言うぞ」

「いえいえ、これが仕事ですから」

魔王と受付嬢はそう言葉を交わすと席を立ち、受付のカウンターの方へと戻っていく。魔王は気分が乗っているのか、足取りが軽い。そうして受付に着くと、魔王はさっそく迷宮へと向かうべくクランから出ていった。取り残された受付嬢は、クランの奥にある神殿の方を見た。そして困ったような顔をする。

「あれ、洗礼を受けて行かなくて大丈夫かな？　まあいっか。困ったらまた戻ってくるでしょうし」

そういうと彼女は魔王の相手をしている間滞っていた仕事を再開するのであった。

★★★★★★

「えーと、確かこちらであつたな」

一方、シーカーランを出た魔王は迷宮の入口に向かって歩いた。月明かりに、彼の銀髪が揺れ、マントがたなびく。人々は浮世離れしたその姿に、好奇や憧憬の眼差しを送った。夜の魔王はとても絵になるのだ。

魔王が街を歩き始めて数分後。彼は大きな広場に到着した。その中心部には大きな長方形のモニュメントのようながあり、その下の部分に大きな穴が空いている。

シーカーらしき姿が多数出入りしているところを見ると、そこが迷宮の入口らしい。そこで魔王は薄暗い口を開けるその穴に入ろう

とした。だが……。

「うぬ、結界か？」

魔王の行く手を何か透明な壁のような物が阻んだ。魔王は足に力を入れて入ろうとするものの、入れない。なかなかどうして頑丈な結界のようだった。

「うぬぬ……！」

しばらくしても、結界は破れなかった。痺れを切らしてきた魔王は力をさらに込め、強引に入ろうとする。魔王を阻む結界が光を放ち、稲妻がほとぼしった。迷宮の入口がみしみしと軋みはじめる。

魔王のただならぬ気配に、シーカーたちが集まってきた。彼らは何か言いたげな顔をするが、魔王の必死の形相に言うことができない。

そんな折、一人の少女が通りかかった。彼女は魔王に近づいていくと、なんのためらいもなく彼に話しかける。

「ねえ、何やってるのよ」

「見ての通り、中に入ろうとしているのだ」

「……ぶっ」

魔王の返答に少女は吹き出しそうになった。赤い髪を揺らして、その小さく整った顔を歪める。笑いを堪えるのに必死なようだ。

「あ、あんたもしかして洗礼を受けてないの？」

「洗礼？　なんだそれは」

魔王はぽかんとした顔をした。少女はその様子にいよいよ堪えられなくなって、大笑いを始めた。腹をほっそりとした手で抑え、鈴が鳴るような声でカラカラと笑う。

「あはは、もう限界！　あのねえ、この迷宮は神殿で洗礼を受けて、神の加護を授けてもらわないと入れないのよ！」

「なんだと。ううむむむ……」

魔王は唸り出した。実にまずい事態であった。洗礼など魔王のすることではないし、だいたい魔王に加護を授けてくれる神などないだろう。だが、この迷宮には是非入ってみたい。

腕を組み、厳めしい顔をして魔王は考え込む。ダメでも洗礼を受けてみるか、もうあきらめるか。魔王の心の中が大きく揺らいでいた。すると、何を勘違いしたのか少女が心配そうな顔をして彼に話しかけてきた。

「もしかしてあんた……迷宮に入れないと行く当てがなかったりするの？」

「そう言われればそうだな」

魔王は心ここにあらずといった様子で応えた。嘘は言っていない。もっとも、魔王にかかれれば行く先などどうとでもなるが。

すると少女は魔王の格好を値踏みするような目でみた。そしてぶつぶつと何か考え込むようにつぶやく。

「それならうちに来ない？　今から洗礼は無理だし、宿屋も空きがないわよ」

しばらくして少女は、魔王にとって予想外の提案をしてきた。魔王は不意に訪れた驚きで目を丸くした。

「助かるな。だがそれで良いのか？」

魔王はとりあえずこの場で考え込むよりは、少女の家でゆっくり落ち着いたほうが良いと思った。しかし、一応礼儀としてもう一度聞き返しておく。

魔族というのは、上位になればなるほど規律や秩序を重んじる。その最高位である魔王は、基本的には思慮深く礼儀正しいのだ。

「良いの良いの。だってあんたほっといたら死にそうじゃない。世間知らなさそうだし」

少女は魔王のマントと杖を指差した。そして少し呆れたように笑う。世間を知らないことは事実なので、魔王は言い返せなかった。ちなみに魔王が手に入れたチンピラ男の知識は、世間一般では役に立たない物ばかりであった。

「よし決定。私はシエリカ。よろしくね」

「余は魔王だ。世話になる」

魔王とシェリカは互いに見交わして笑った。シェリカはそうしてひとしきり笑うと、魔王を手招きしながら彼女の家へと歩いて行く。

こうして魔王はシェリカに連れられて、彼女の家へと向かったのだった。

第四話 魔王とおせっかい少女（後書き）

魔王さまが凄い世間知らずに……。迷宮に入れば、迷宮に入りさえすれば魔王さま無双しますのでお許しを！

第五話 同居人？（前書き）

話が想定したところまで行かなかった……。すいません！

第五話 同居人？

第五話 同居人？

迷宮都市の北部一帯。俗に貴族街とよばれるそこは、シーカー克蘭などのある南部とは違って、立派な屋敷の並ぶ高級住宅地である。

そのはずれをシェリカと魔王は歩いていた。住む人間が夜の外出などしない人間ばかりからか、通りは暗く、寂しい。月だけが、優しく彼らを見守っていた。

「ここが私の家よ」

シェリカは立ち止まると、一軒の屋敷を指差した。立派な門構えをした屋敷だった。その門の向こうには広い庭と、噴水などが見える。さらにその奥には赤い色調の、二階建ての家がそびえていた。

しかし長年手入れをされていないのか、庭に雑草は生え放題で噴水の水は緑に変色している。さらに、建物の方も煉瓦の赤がくすみ、さながら幽霊屋敷のようであった。

「……古いが立派な家だな」

「ぼろいが、でしょ。別にお世辞言わなくても良いわよ。さ、中に入りましょ」

そういうと、シェリカは屋敷の門を押し開け、庭を抜けて中に入っていた。魔王もその後が続いていく。

屋敷の中はその外観に相応しく、豪奢であった。絨毯が敷き詰められ、天井からはきらびやかシャンデリアが下がっている。だが絨毯は色あせ、シャンデリアは埃まみれであった。それに夜であるというのに、明かり一つついていない。

「さっきから人の姿が見当たらないが……。もしかしてこの広い屋敷に一人暮らしなのか？」

屋敷の中に明かりがついておらず、人氣がまったくなかったのも魔王は半ば呆れたようにシェリカに尋ねた。これだけ広い屋敷なのだから、使用人の一人や二人は居るべきだろうと思われた。

すると、シェリカはどこか寂しげに顔を俯けた。そして微かな声でささやくように答える。

「ええ、そうよ。お父さんとお母さんが死んじゃってね。使用人も昔はいたんだけど、給料を払えないから暇を出したわ」

家の中が石化した。魔王はシェリカの弱々しい様子に口をつぐむ。しばし、微かに流れる風の音だけがした。二人は沈黙したままだ。

月が陰り、ヒュウと一際大きく風が唸った。ここでもようやく魔王は重々しく口を開けた。

「そうか、すまない。変なことを聞いたな」

「謝らなくても良いわよ。二人ともシーカーだったから……。そんなことよりもあんた、もう晩ご飯食べた？」

シェリカは話題を変えると顔を上げた。そして、魔王に向かって笑いかける。魔王もぎこちなく笑ってシェリカに答えた。

「いや、まだだ」

「それじゃあ一緒にご飯にしない？ 私もまだなのよ」

「そうだな」

「じゃあこっち来て。ご飯にしましょ」

シェリカは食料のある厨房に向かった。魔王も誘われるまま着いて行き、シェリカと食事をとった。保存食中心の簡素な食卓であったが、魔王はおいしく食べられた。魔界の食べ物は総じてまずいかったのだ。

こうして食事を食べた後は特に何事もなく、魔王はシェリカの家の一室で朝を迎えた。

★★★★★★

「ねえ、物は相談なんだけど……」

「なんだ？ 言ってみるが良い」

翌日、食堂で朝食を食べているとシェリカがぼそぼそと魔王に切り出した。何を照れているのか、手を顔の前で盛んに動かしている。魔王はその様子に首を捻った。何を言うつもりなのかと。

「あんたさ、家に住むつもりはない？ お金は取らないから」

「なんだ、そんなことか。住ませてくれるのならむしろありがたいぐらいだ」

魔王はなんでもないかのように答えた。すると、シェリカの表情がみるみる明るくなっていった。よほど魔王と一緒に住めることが嬉しいようだ。

「そう！ 良かったあ。実はね、一人で少し寂しかったのよ。だからあんたを泊めたんだけどね。でもあんた貴族みたいだからさ、こんな家すぐに出ていくんじゃないかなと思って心配したのよ」

「それなら心配いらない。余はこの家を気に入ったからな」

嘘ではない。魔王はこの家のことが本当に気に入っていた。彼の故郷、魔界にこの家の暗く、寂しい雰囲気似ているのだ。

「ありがと。そうと決まったらご飯も食べたし、神殿に行くわよ。また昨日みたいにされたら同居人の私が恥ずかしいからね！」

「あ、ああ……」

シェリカは皿を片付けると、魔王の手を引っ張って強引に出掛けようとした。魔王はそれにおおいに戸惑う。

実はまだ、洗礼を受けるかどうか決めかねていたのだ。しかし、シェリカはそんなことお構いなしに連れて行こうとする。彼女は突っ立っている魔王の手を強く引っ張った。

「ほら、行かないの？」

「ううむ……仕方ない、あの結界の突破は難しそうだからな」

しばらくして、散々悩んだあげく魔王はシェリカに着いて神殿へ向かうことにした。洗礼を受けなければ迷宮に入るのが難しかったことと、何よりシェリカの押しが彼にそう決断させた。

魔王とシェリカは家を出て、神殿へ歩いた。すると、シェリカはシーカー克蘭の方向へと向かっていく。そして彼女と魔王はシーカー克蘭の前に来てしまった。

「ここの神殿だったのか……」

「知らなかったの？」

「ああ、なにぶん余はこの世……街に不慣れなのでな」

シェリカは魔王の世間知らずに肩を竦めると、克蘭の扉を開けて中に入って行った。そして奥の神殿へと入っていく。

魔王もシェリカに続いて神殿の中に入ってみると、存外に広かった。白亜の大理石の通路が広がり、太い柱が立ち並ぶ。克蘭に繋がっているのは数ある出入口の一つに過ぎないようで、神殿はシーカー以外にもたくさんの人で賑わっていた。魔王はしばらく神殿という苦手な空間と人の熱気に圧倒された。

「こっちよ、早く来て！」

魔王が固まっていると、通路の奥でシェリカが叫んだ。人々は驚いてビクツとし、シェリカの方を向く。魔王はその声の大きさに慌

ててシェリカの方に走った。

「あなたが魔王さん？」

シェリカの脇に小柄な少女が立っていた。白い服を着て、頭にチヨコンと十字架の描かれた帽子を被っている。聖書のような物を脇に抱えていることからして、おそらく神官の一人だろう。だがこの少女、身体から黒い気配を漂わせていた。

「いかにも余が魔王だ」

「そう、なら着いてきて。洗礼の間はこっちよ」

そういうと神官の少女は通路の脇の扉を開け、魔王を手招きした。魔王はシェリカの方を向いて困ったような顔をする。だが、彼女は頑張っていると笑うだけだった。

洗礼には一人で行くしかないらしい。そう悟った魔王はどこか重い足取りで神官のいる扉に向かった。その顔はとても曇っていた。

その様子に、神官の少女は生暖かい目をして、口元を抑えた。そして、魔王をして魔族のようだと思わせる笑いをしながら言う。

「くすくす……後ろめたいことがあるのね。でも大丈夫、あなたが悪の代名詞のような存在でも神は加護してくれるわ。ただし、そういう神だけだね……ふふふっ」

「そ、そうか」

魔王はギクツとした。少女の指摘はまさに凶星であった。まさか

この神官……と思って少女の方を見る。しかし、少女はニヤツと腹黒い笑みを浮かべ、その氷のような青い瞳で魔王を見つめるばかりであった。

「うふふふ……安心したならこっちに来て。早くしないと私の休憩時間があなたの洗礼で潰されてしまうわ」

少女はそういうと扉の向こうへと消えた。魔王も渋々ながら扉の向こうへと向かう。

こうして魔王は多大な不安を感じながらも洗礼に臨むのであった。

第五話 同居人？（後書き）

評価ポイントが私的にはすごく伸びてます。べ、別に嬉しくな
んかないんだからね！

第六話 混沌神

第六話 混沌神

神殿の奥深くにある洗礼の間。円形の空間に太陽光が射し込み、正面のステンドグラスが輝いていた。その床には星をもした魔法陣が揺らめき、その頂点に一つずつ水晶が置かれている。

魔王がそこに着いた時、すでに先客が何人かいた。みな緊張した面持ちで魔法陣の方を見つめている。

「ここで待っていて。順番が来たら呼ぶわ」

「ああわかった」

神官の少女はそう告げると、魔法陣の近くへ歩いて行った。少女は魔法陣の脇の椅子に座ると、こほんと咳ばらいをする。そして彼女はすでに並んでいたシーカーたちの方をみた。

「次の方、前へ」

「はい」

先頭に立っていたシーカーが魔法陣の中心へと移動した。すると、水晶球が青白い光を放つ。光は朧げながらも人の輪郭を描いた。

「むむっ神か……」

魔王は急激に膨れ上がった神の気配に、思わず杖を手に取り身構

えた。神がここに顕著しようとしているのだ。だが、神と戦うわけではないのですぐに構えをとく。

魔王がそうしている間にも、神はその姿を現した。ぼんやりとした光の塊がその輝きを増していく。

「汝は力を望むか？」

光の塊は心に染み入るようなずしりと重い声を発した。その問い掛けに男はただ頷くだけだ。

「では汝に我が力の一部を与えん」

神がそう告げると同時に、水晶から光が飛び出て男にぶつかった。男は苦痛に顔を歪め、膝を屈する。

「うがああ！　ぐおお！」

男は一際大きな悲鳴を上げた。ステンドグラスがじりじりと揺れ、シーカーたちはその様子に顔を歪める。

しばらくして水晶の光が収まった。男はぐったりと血の気のない顔をして立ち上がる。すると、水晶から再び光が放たれ男を包み込んだ。男の顔色が赤く変わっていき、その手足に力が戻っていく。

「終わりよ。戻って」

男があらかた回復したところで、少女は男に声をかけた。男は魔法陣からゆっくりと出て行く。そして鎧の中からクランカードを取り出した。

「やったああ！ 大地神アーシア様だあ！」

男はカードを見ると大声を上げた。その様子に周りのシーカーたちがががやがやとどよめき始め、場が騒然となる。

「なんだ？ おい、何が起きたというのだ？」

魔王は何故シーカーたちが騒ぎ立てるのかと首を捻った。魔王はとりあえず前にいたシーカーに聞いて見る。するとそのシーカーは魔王を田舎者でも見るような目でみた。

「大地神、しかも最高のアーシア様の加護だぜ。みんな驚いて当然さ」

「ふうむ、余にはいまいちその凄さがわからんな」

シーカーの男はハアとため息をついた。そして魔王の方に呆れたような視線を送る。魔王はその態度に不機嫌になるが、何も言わない。

それからしばらくの間、特に大したこともなく洗礼は進行していった。そして、とうとう魔王の順番がまわってくる。

「次の方、前へ」

少女の呼び出しに従い、魔王は魔法陣の中心に立った。すると、水晶が不気味に紫に染まる。その様子に少女やシーカーはいぶかしげな顔をした。

「うーん、こんな色になるなんて……珍しいわ。面白い……」

「おいおい、ありややばくねえか？」

「まがまがしい……」

少女やシーカーに混乱が広がった。水晶は青く輝く物で、紫に染まるなどありえないのだ。そのことを知っている少女や一部のシーカーたちが、何が起きるのかと騒ぎ出したのだ。

魔王自身もただならぬ気配に身を固めた。神経を張り詰め、不測の事態に備える。すると、水晶から障気のような霧が噴き出して、魔王の周りを包み込んでいった。

「これは障気……いや、微かに光の力も感じる……」

障気のような霧は魔王にも未知の物であった。少なくとも魔界に満ちている障気とは違う。微かに光の力が感じられたからだ。障気に光の力が混じるなどありえない。

魔王が霧の正体を考えあぐねていると、霧はいよいよ密度を増してきた。ステンドグラスにヒビが入り、太陽光がにわかに遮られる。魔王の後ろにいたシーカーたちは恐怖にかられて後ずさる。

「ろくでもない存在が現れるようだな」

魔王の鋭い感覚が何者かの接近を感じた。ひたひたとゆっくりだが確実に近づいてきている。光とも闇ともつかぬその存在は途方もなく巨大で計り知れない。下手に知ろうとしたならば、発狂しかねないほどの存在だった。

「あなた面白い存在だねえ」

洗礼の間にどこからか若い女の物とおぼしき声が響いた。ただし、聞きようによっては男の声にも聞こえるし、はたまた老人の声にも聞こえる。ありとあらゆる声が自己主張を保ったまま重なりあったような声なのだ。

その声を聞いた途端、洗礼の間にいた魔王以外の人間たちは脳の情報処理に限界をきたしたのか気絶した。およそ人間に耐えられる声ではないのだ。しかし、人ならざる魔王は超然とした態度で虚空を睨みつける。

「何者だ？ 貴様は神なのか？」

「人間や他の連中はそう呼ぶわね」

「ならば姿を現せ」

「いいわよ」

霧が一点に集まり始めた。そしてだんだんと人の形になっていく。その存在感はさきほどの大地の神の比ではなかった。文字通りの意味で存在している次元が違うのだろう。そのあまりの力に魔王すら背中に冷や汗を垂らす。

霧の塊の輪郭がはっきりとしてきた。若い女のような姿だ。長い髪を流し、ローブのようなゆったりとした服を着ている。その顔は秀麗で、各パーツの調和を限界まで突き詰めたような感じであった。まさに人知を超越した美しさであろう。

「私の名はヘカテ・メンリ。天地開闢の前より生きる最も古い神よ。
司るものは混沌ね」

姿を現した恐るべき超越存在は、魔王にそう名乗ったのであった
……。

第六話 混沌神（後書き）

神さまがなんかとんでもないことに……。後悔はしてないけどね！

第七話 初めの一步

第七話 初めの一步

暗雲立ち込める洗礼の間。そこは気絶した人間が重なり合ってたわり、ステンドグラスはひび割れ、凄惨な状況に陥っていた。

その部屋の中央で魔王と混沌たる神、ヘカテ・メンリは睨み合っていた。あたりの空気は張り詰め、時折火花を散らしている。

「なにゆえにここに現れたのだ？」

魔王は重い口を開くと、至極穏やかな口調でそう言い放った。それを聞いたヘカテ・メンリは目を細めてけらけらと笑う。

「なにゆえかって？ あなたが面白そうだからねえ、加護してあげようと思って。ただそれだけ、他意はないわ」

「ほう……」

魔王は少し驚いたように言った。そしてヘカテ・メンリの顔を見る。その顔は背筋を凍らせるような笑みを浮かべるばかりだった。言葉通り、加護を授けに来ただけであるようだ。

「わかったくれたようねえ。それじゃあ形式に乗っ取りまして……。汝は力を望むか？」

ヘカテ・メンリはからかうようにそう言った。すると、魔王も目を歪めて、その称号に相応しく不敵に笑う。

「ああ、望もう」

「よろしい、では汝に我が力の一部を与えん」

ヘカテ・メンリは他の神に似せたのか、重々しく威厳のある声でそう告げると去っていった。その存在感が空気に溶けるように消え、魔王の背筋が緩む。

だが次の瞬間、魔王の身体に激痛が襲来した。熱い物が皮膚の下や筋肉の中をうごめくような強烈な痛みと、果てのない違和感が魔王を襲う。しかし、魔王は無表情で眉一つ動かさない。痛みで騒ぐようなことは、彼の魔王としての矜持が許さなかったのだ。

「……ふう。収まったようだな」

魔王にとって長い時間が過ぎたところで、ようやく身体の感覚が正常に戻った。その時、魔王の顔がわずかだがやつれたように見えたのが、洗礼の儀式の凄まじさを物語っていた。

水晶が光った。白い光が魔王の周りだけでなく、洗礼の間に満ちていく。すると、時が逆行していくように洗礼の間がもとに戻っていった。ステンドグラスのひびが治り、気絶していた人間たちが目を覚ます。

「むう、儀式が終わったのなら早く魔法陣から出て。後が詰まっているわ」

神官の少女が、さきほどのことなど忘れたかのように魔王に言った。ヘカテ・メンリが気を効かせて記憶を改竄したようだ。それは

他の人間も同様のようだった。魔王は騒ぎにならなくてほっと息をつく。

「早くと言っているわ……」

「すまない、考え事をしていたのでな」

魔王は少女の冷たい声に、足早に移動した。そして、前に通った道を通ってシェリカのいる場所まで戻っていった。

「あっ、お帰り。結果はどうだった？」

通路の扉を開けると、早速シェリカが声をかけてきた。心配で待っていたようだ。魔王はその様子に苦笑いを浮かべる。

「それなりと言ったとこだった」

「はあ、それなりってあんた……。もう、カードを見せてくれない？」

シェリカは頬を膨れさせると、魔王が手に取っていたカードに視線を向けた。魔王はその行動に、変な顔をしてカードを背中後ろに隠す。

「どうして見たいのだ？ そなたには関係あるまい」

「関係ない訳ないでしょ。これから一緒にパーティーを組もうと思ってるんだから」

シェリカは腰に手を当て、ビシツと言い放つ。魔王はそれにきよ

とんと固まった。シェリカがどうしてそんなことを言うのか彼にはわからなかった。

「パーティー？ どうして？」

「はあ……あんたもシーカーで私もシーカー。それで同居してる。さらにお互いにソロで仲間募集中！ これでパーティー組まないなんてなかなかありえないわよ」

「……そういうものか？」

「そういうものよ！」

魔王はふうむと考え始めた。顎に手を当て、思考をめぐらせる。知識のない魔王にとってシェリカの知識は魅力的だった。だが、シェリカは足枷となりかねない。

しばらくして魔王は顔を上げると、見定めるような目でシェリカを見た。そして、軽いため息をつく。

「素質はあるな。ついて来るぐらいなら出来るか」

魔王はシェリカには聞こえない小さな声でそういうと、カードを改めて出した。そして、険しい顔であらかじめシェリカに注意しておく。

「シェリカ、何が書いてあっても騒ぐなよ」

「そんな、別に騒がないわよ。はいこれ、私のカードよ。……ふふ、何が書いてあるのかな……」

シェリカは魔王に自分のカードを手渡すと、ワクワクした表情で魔王のカードを見た。そしてみるみるうちに固まっていく。そして次の瞬間……

「レベル五百に混沌神の加護！ あんた、冗談は服装と行動だけにしなさいよ！」

固まっていたシェリカが爆発した。顔を赤く染め、炎のような勢いで魔王に詰め寄る。しかし、魔王は詰め寄ってきたシェリカを冷静に宥めた。

「騒ぐなと言ったであらう。落ち着け」

「騒ぐなって言われててもねえ、限度って物があるでしょうが！」

「騒ぎ立てたところで事実が変わらんぞ。落ち着くのだ」

魔王とシェリカのやり取りはしばらく続いた。だがとうとう、シェリカは怒鳴ることに疲れたのか肩をすくめて黙った。そしてまたしばらく経ってから口を開く。

「もういいわ。強いぶんには困ることはないし。では早速、今から家に戻って迷宮へ行く準備をしましょうか」

「そうだな」

こうして洗礼を終えた魔王とシェリカは、迷宮へ赴くべく一端家へと戻るのであった。

★★★★★★

陽光が街をあまねく照らし、腹を空かせた人々で街の店がいっぱいになる昼。迷宮都市の中央には今日も巨大なモニュメントそびえ、大きな影を作っていた。その影の中にある迷宮の入口に、二人のシェリカがやってきていた。魔王とシェリカだ。

「昨日も思っただけど、あんたその格好で迷宮に入るつもり？」

シェリカは魔王の昨日から変わらぬその格好を指摘した。深紅のマントに黒い杖をついた魔王の服装は、どう見ても迷宮には向いてなさそうだったからだ。

ちなみにシェリカ自身は動き易さを重視した軽い革の鎧を着ていて、腰には剣を下げている。駆け出しのシーカーに良くあるスタイルだった。

「このマントと杖は共に最高級の品だ。これを超える装備などそうはない」

魔王は自信たっぷりそう断言すると、杖を地面に叩きつけた。地面に敷かれていた石が割れ、深い亀裂が生まれる。

一方、杖の方はまったくの無傷だった。先端に付けられた繊細な装飾にもまったく変化は見られない。それが最高級の装備であることは明白だった。

「へえ、たしかに言うだけのことはあるわね。それなら装備に問題はないし、行くわよ」

シェリカは納得したようにそう言うと、迷宮の入口へと入っていった。魔王もゆっくりとその後に続いていく。

魔王がわずかながら緊張した面持ちで、迷宮に一步を踏み出した。迷宮を守る結界は働くことはなかった。魔王はようやく、迷宮に入る事ができたのだ……。

第七話 初めの一步（後書き）

ようやく迷宮の攻略開始です！
それにしても迷宮に入るまでが
ずいぶんと長かったなあ……。。

第八話 迷宮第十階層（前書き）

ついに迷宮初探索です！

第八話 迷宮第十階層

第八話 迷宮第十階層

「ほう、これは見事だ」

迷宮の中に入った魔王は、その光景に感嘆したように声を上げた。黒い石が紙一枚入らないほどの精度で組み合わせられた壁に床。高い天井は神秘的に輝き、迷宮の中を暖かく照らし出す。さらに、一定の感覚で壁がへこんでいて、そこに人の背丈ほどの緑色の結晶が置かれていた。

シーカーたちはその結晶を中心に集まっていた。彼らは結晶に手を触れると次々とどこかに消えていく。どうやら結晶には転移の魔法が込められているようだ。

「すごいでしょ。ここが迷宮第零階層、転移の広間よ。みんなこのクリスタルで迷宮の他の階層へ向かうの」

シェリカは別に自分の物でもないのに少し自慢げに言った。そして、魔王をさきほどの結晶の前に連れていく。これがクリスタルのようだ。

「迷宮での階層移動は全部これを使うわ。使い方はね、手を触れて行きたい階層を言えばいいだけ。ただし、パーティーの中の誰かが行ったことのある階層か、今いる階層の一つ下にしか移動できないからね」

「ずいぶん簡単だな。転移魔法はそう易しい魔法ではないはずだが

……」

シェリカの説明したにあまりにも簡単なクリスタルの使い方に、魔王は少し驚いた。そして、クリスタルを軽く叩いてみたり、撫でてみたりして調べる。

その結果、魔王にも未知の技術が使われていることだけがわかった。

「ちょっとあんた何やってるの？ クリスタルなんて調べても何もわからないわよ。学者が何年かけてもわかんないんだから。そんなことより、早く行くわよ」

魔王の不可解な行動に、シェリカは少し苛立ったように言った。その手はすでにクリスタルに置かれている。出かける気満々のようだった。

「それもそうだ。我らはこれを見に来たのではないからな。ならばシェリカ、そなたはどこまで深く潜れるのだ？」

魔王はシェリカのもっともな意見に、クリスタルから目を離すと、ついでに質問をした。シェリカは不意の質問に戸惑ったがすぐに答える。

「一応十階まで行けるわ。だけどどうして？ まさかあんた……ここから行くつもりなの！」

「ああそうだが」

「あんたね、弱い初心者が最初から……ってあんたは強かったわね」

シェリカは注意しようとしたところで魔王がレベル五百だったことを思い出した。初心者だが、レベル的にはレベル十のシェリカの五十倍は強いのだ。十階層ぐらいどうってことはないはずだった。

「わかった、十階に行きましょう。ただし、迷宮の中は危険がいっぱいなんだからね！ 気をつけなさいよ」

「もちろんだ」

「よし、じゃあ迷宮第十階層へ！」

シェリカが気合いを込めてクリスタルに告げた。すると景色が歪み、浮遊感が魔王とシェリカを襲う。魔王は初めての感覚になんとも言い難い不快感を覚えた。

「気持ちの悪いものだな。毎回こんな感覚なのか？」

十階層にはすぐについた。歪んだ景色が元に戻り、魔王の目に見慣れない景色が広がる。だが、魔王は辛そうに頭を抑えた。その様子はちょうど、二日酔いをしたようであった。

「酔ったのね。でも慣れれば感じなくなるわ。ほら、そんなことよりも周りを見てよ！」

シェリカは魔王を立たせると、周りの景色を指差した。魔王はその熱心な様子に顔を上げて辺りを見回す。

「これはなかなかの物だな」

辺りには美しい鍾乳洞が広がっていた。滑らかな乳白色の鍾乳石がごつごつとしていて、滴る水が光を虹色に反射する。空気はひんやりと清涼で、そのわずかな流れが心地好い。

魔王はその様子に感心したようにつぶやいた。その顔色はすでに回復していた。さすが魔王、回復力も尋常ではない。

「感心するのも良いけど、そろそろ行くわよ」

シェリカは感心しきりの魔王を引っ張ると、探索に出発した。曲がりくねった鍾乳洞の中を、二人はその天井に灯るわずかな明かりを頼りに進んで行く。辺りには水の滴り落ちる音と、二人の足音だけが響いた。

すると、岩の陰から黒い物体がたくさん飛び出して来た。物体は人間の上半身ほどの大きさがあり、闇色の翼と刃のように光る牙を持っていた。

「キラーバットよ！ 噛み付かれたら最後、血を吸い付くされるわ！」

シェリカはそう叫ぶやいなや腰から剣を抜き放った。鉛色の剣が鈍く輝き、閃く。シェリカはキラーバットを袈裟に切り裂いた。血の花が咲き、シェリカの鎧が紅に染まる。その一連の動きは舞っているかのように流麗だった。

しかし、キラーバットはたくさんいる。さらに、後から後から洞窟の中から無尽蔵とも言えるほど出てきた。これがこのキラーバットの恐ろしいところだ。シェリカはそれを次々と切り裂くものの、キリがない。

「うっとうしいな。余がまとめて退治してやろう」

シェリカの戦いぶりを見守っていた魔王は、そう言って彼女を下がらせた。そして杖を振り上げ、不敵に笑う。

「カッター・ストーム」

魔王の唇が呪文を紡いだ。杖の宝玉が邪悪に輝き、魔力が渦巻く。周囲の空気が引き締まり、痺れるようになった。その変化に、シェリカは身を竦める。

暴風とともに、無数の見えない刃が放たれた。刃は唸りを上げながら、キラーバットを切り刻む。キラーバットは悲鳴すら上げずに肉の塊へと変えられていく。そして、その肉の塊はすぐに小さな球へと姿を変えた。

キラーバットがあらかた居なくなつたところで、魔王は満足そうに頷いた。あたりには無数の球と、魔法に巻き込まれたのか鋭利な切り口を晒す岩だけが残っていた……。

第八話 迷宮第十階層（後書き）

ようやく初探索。でも、まだまだ先は長いんだよなあ……。。

第九話 換金所にて……

第九話 換金所にて……

薄暗い鍾乳洞のような迷宮第十階層に、魔王とシェリカはいた。彼らの周りには無数の黒い球が散乱していて、シェリカはその様子に咄然している。その目は飛び出しそうなほど開かれていて、口も半開きだ。

「さすがレベル五百……あれだけの群れを一撃とはね……」

しばらくして精神的に復活したシェリカは呆れ果てたようにつぶやいた。魔王が魔法で倒したキラバットはたしかに弱いモンスターだ。だが、数十単位で一掃しようとしたらかなりの大魔法が必要だろう。とても、今のシェリカには無理な芸当だ。

数値の上ではわかったつもりであったが、この出来事でシェリカは改めて魔王の力を認識した。そして微かな畏怖と大きな頼りがいを感じるのであった。

「これで邪魔はいなくなったな。先へ進むぞ」

「ちょっと待って！ 魔力球を回収しなきゃ」

魔王が先へ進むもうとすると、それをシェリカが呼びとめた。そして彼女は腰に付けているポーチに落ちていた球をどんどんとほうり込んでいく。魔王はその様子を物珍しそうに見ていたが、やがて小さな疑問を抱いた。

「こんな球をそんなに集めてどうするのだ？ それに、どうしてそのポーチは膨らまない？」

魔王はシェリカのポーチを指差した。すでにその体積以上に球が詰め込まれているはずのポーチは何故か膨らんでいない。シェリカはこりゃだめだのため息をつくとき、魔王の質問に答えた。

「はあ、戦闘力は最強だけど知識はルーキー以下ね。仕方ない、教えて上げるわ。この球は魔力球と言ってクランで換金できるのよ。だから集めてるの。で、このポーチはシーカー愛用のデラックポーチ。魔法が掛けられていてどれだけ物を入れても膨らまないし、重くもならないのよ」

「なるほど、それはらば余も手伝ってやろう」

魔王はそう言うとき、球を集めるのを手伝い始めた。二人でやればさすがに作業は速く、たくさん落ちていた球もあつという間に少なくなっていく。

「これで最後だ」

魔王が最後の一つをポーチに入れた。シェリカは辺りを見回して他に落ちていないことを確認すると、立ち上がって腰をぽんぽんと叩く。

「全部拾えたようね。それじゃ先に行きましょうか」

シェリカはそう言うときまた歩き出した。魔王も後から続いていく。二人で歩いていくその様子は娘とそれを後ろから見守る父のようだった。

その後は特に何事もなく探索は続いた。シェリカや魔王は軽い足取りで迷宮の奥へと進んでいく。その時、魔王は散歩しているかのようだった。いや、散歩よりも緊張感がなかったかもしれない。なぜなら彼がいつも散歩していた魔王城周辺には、野生の上級モンスターがうろうろとしていたのだから。

「もう帰らない？ もう足と集中力が限界よ」

迷宮第二十階層。そのクリスタルの前で、ついにシェリカがそう提案した。彼女はパンパンに張った足を抑え、辛そうにしている。魔王がいるからそれほど負担はなかったにしろ、一度に十階も潜ったのはやはりきつかったのだろう。

「仕方ないな。戻るか」

「ええ、すまないけどそうしましょ」

こうして魔王とシェリカは今日の探索を終え、地上に戻ったのだった。

★★★★★★

シーカー克蘭の中にある換金所。迷宮で手に入るさまざまなアイテムを換金できるそこは、今日も混み合っていた。そこへ、二人のシーカーが入ってきた。

「あら、この間の魔王さん！」

カウンターに座っていたのはいつかの受付嬢であった。彼女は魔

王とシェリカの姿を確認すると、にっこり微笑んだ。

「そなたはいつぞやの受付嬢か。換金もしているのだな」

「はい、そうですよ。クランも人手が足りなくて。あなたこそ、そちらの女の子はお仲間ですか？」

「まあそんなところだ」

魔王と受付嬢はそのまま談笑を始めそうな雰囲気になった。だが、その流れをシェリカが打ち切った。彼女は魔王の前に出ると、カウンターの上にポーチを置く。

「そんなことは良いわよ。それよりこれ、換金して」

「はい、少々お時間を……あらら、ずいぶん集めましたね」

受付嬢はポーチをひっくり返すと、その中に入っていた魔力球の数に目を丸くした。そして虫眼鏡を取り出してひとつひとつ確認していく。

「全部で百二十三個、十二万三千ルドになりますね。……ふう、しかしよくこれだけ集めましたね。って魔王さんなら出来ますか」

受付嬢は一瞬訝しげな顔をしたが、相手に魔王がいたことを思い出した。魔王だったら何が起きても不思議ではない。

受付嬢は気を取り直すと、カウンターの中から袋を取り出した。そして金貨を十二枚と銀貨を三枚シェリカに手渡す。シェリカはその金額に顔をほころばせた。

「結構あったわね。今日はこれでご馳走でも食べるわよ」

シェリカはホクホク顔をして換金所から出て行こうとした。すると、換金所の入口で数人の男女とすれ違う。シェリカは彼らの顔を見ると、露骨に顔を歪めた。

「これはこれは烈火と旋風の娘さん。あなたにもお仲間ができたんですねえ」

集団の先頭に立っていた小柄な女がシェリカに声を掛けてきた。純白の髪をかき撫でながらいかにも甘ったるい声を出す。シェリカはその言葉にムツと膨れると、魔王の手を掴んだ。

「そうよ、悪い？」

「いえいえ、逆ですよ。私はむしろ私たち『銀の杯』の誘いを頑固に断り続けていたあなたに、果たして仲間なんてできるのか心配していたくらいなんですからね」

女は形の良い薄い眉を寄せた後、すぐに芝居がかった動作でおどけて見せた。シェリカはそれを見た途端、きつい目つきで女を睨む。だが、女は軽薄そうに笑うだけだった。

「心配ありがと。でもこの通り、ちゃんとできたわ。……もう忙しいから行くわね」

「そうですね。ではご機嫌よう」

シェリカは何か言いたそうな魔王を引っ張って換金所から出た。

そして拳をにぎりしめ、顔を真っ赤にする。そのただならぬ様子に魔王はシェリカに質問をした。

「あの女は？」

「あいつはユリアス。一応最強と言われてるギルド銀の杯のリーダーよ」

「ほう、ならどうしてそんなに仲が悪いのだ？」

「あいつは見ての通りあんまり良い性格してないし、いつもニコニコしてて気味が悪いのよ。それに私の親が有名なシーカーだったからか、やたら熱心に自分のギルドに勧誘してくるし。でね、それを断り続けてたら仲が悪くなったというわけよ」

「そういうことか。たしかにあの女は得体が知れないからな」

そういうと、魔王はユリアスの目を思い出した。人間のものではずのその目からは、何故か魔族にも似た邪悪な気配が感じられていた。

「まああんな奴のことは気にしないで置きましょう。お腹も空いたし、早くご飯を食いたいわ」

少しして機嫌を直したシェリカが魔王にそう告げた。魔王はそれにたいして素直に頷く。魔王も腹は空いているようだった。

こうして二人は夕食を食べるべく街へと出て行った……。

第九話 換金所にて……（後書き）

今回の話は結構大変でした。何が大変だったかと言うとユリアスのセリフ。作者が好きなかっせいか、何度書いてみて某宇宙の帝王みたいな口調にしかならなかったのですよ（笑）

第十話 仲間の必要性？（前書き）

今回はちょっと急展開かも知れません……。。

第十話 仲間の必要性？

第十話 仲間の必要性？

魔王の迷宮初探索から一週間が経った。あれから二人は順調に探索を続け、今日も朝から迷宮に潜っている。

「エイ！ ヤアア！」

薄暗い鍾乳洞のような迷宮第三十二階層。岩だらけで狭いそこで、シェリカと魔王は襲い掛かかってきたモンスターと戦っていた。暗闇に剣の剣先が光り、杖が唸っている。

二人に襲い掛かっているのはダークゴブリンというモンスター。黒い小さな子供のような姿をしていて、岩陰から飛び出して攻撃してくるモンスターだ。だが小さな身体に反してその腕力は強く、手に持つこん棒での打撃が厄介なモンスターである。

それをシェリカと魔王はさきほどもからずっと相手にしていた。迫るこん棒を巧にかわし、すれ違い様に剣や杖での一撃を放つ。そうして一体一体倒しているのだが、なかなか数が減らない。相当大きな群れに当たってしまったようだ。

「魔王、私はもうちょっと限界よ！ 一人でなんとかできる？」

「任せておけ」

腕が動かなくなってきたシェリカは魔王に後を任せた。後を任せられた魔王はシェリカの前に立つと、杖を構えて呪文を紡ぎ出す。

「カッター・ストーム」

暴風と風の刃がダークゴブリンに襲い掛かった。彼らは一瞬で八つ裂きどころか百裂きぐらいにされて魔力球へと姿を変える。だが、蝙蝠とは違って彼らには多少の知恵があった。いくらかのダークゴブリンがすばやく岩に隠れて刃の嵐をやり過ごす。

「少しは頭が回るか。ならば……」

魔王の口が今度は違う呪文を紡いだ。辺りの空気がゾワリとして、ダークゴブリンたちはキィキィと奇声を上げる。

「ファイア・フロッド」

魔王の杖から炎が巻き起こった。炎は迷宮の中を赤々と照らし、熱の大洪水を起こしていく。ダークゴブリンたちはまたもや岩に隠れてやり過ぎそうとしたが、圧倒的な熱波の前に岩の盾は役に立たなかった。耳を引っ掻くような悲鳴を上げて彼らはみな焼け死んでいく。

「終わったな」

魔王は焦げ臭い臭いに顔をしかめながらそうつぶやいた。その言葉に後ろにいたシェリカもホッと一息つく。そして二人は残された大量の魔力球の回収を始めた。

「にしてもずいぶんたくさん居たわね。普通は出ても四匹がいいところよ」

「他のモンスターにも良く遭遇したからな。何かあるのやも知れん」

魔力球を拾いながら、シェリカと魔王は眉を歪めた。いつもと比べてその数が多過ぎるのだ。モンスターというのは変化に敏感だ、こういう場合は何かある。嫌な予感を二人は覚えた。二人の背筋がひんやりとする。

その後二人は、大量に現れるモンスターたちに辟易しながらも、三十四階まで潜った。そして、シェリカが集中力と体力が限界を迎えたので二人は今日の探索を打ち切る。

「騒がしいわね。何かあったのかしら！」

二人が転移の間に戻ってくると、辺りは騒然としていた。シーカーたちが集まり、人だかりを作っている。シェリカは魔王の手を引っ張って人を掻き分けていった。

「ど、どうしたのよこれ！」

シェリカが人だかりの中心に行ってみると、そこには数人のシーカーが横たわっていた。彼らはみな一様に血に濡れている。着ている鎧は大きくひしゃげ、息は絶え絶え。顔面は蒼白で今にも息絶えそうだ。

「おい神官！ 神官はいないか！」

「わ、私神官です！」

「僕もです！」

瀕死のシーカーに駆け寄っていた男たちが、神官を呼ぶべく叫びを上げた。それに、何人かの神官が応え、シーカーたちに治療を施していく。暖かい光が彼らの手から発せられて、シーカーたちの顔色がわずかだが回復し始めた。

「ぐっ……はあはあ……」

一人のシーカーが意識を取り戻した。彼は何かを言おうと口をばくばくとさせる。それに気がついた周囲のシーカーたちは口を閉じ、彼の言葉に耳を傾けた。騒がしかった場がにわかに静まる。

「岩……龍が……目覚め……た……」

シーカーはそれだけ言うともた意識を失った。しかし、そのたった一言で周囲は大混乱に陥った。それはシェリカも例外ではなく、顔を青くして身体を硬直させる。

「どうしたのだ？ 顔色が悪いぞ」

「あんたは知らないから呑気なのよ……」

一人だけ呑気な魔王に、シェリカは険しい口調でそう言った。そして大きく深呼吸して、魔王の方に向き直る。

「あのね、たぶんあの人は岩龍が目覚めたって言ったわ」

「ああ、そうであろうな。だが、それがどうしたというのだ」

「岩龍っていうのは五十階層に住んでいる巨大なドラゴンよ。岩みたいに動かないからそう呼ばれてただけど……」

シェリカはそう言うと言葉を詰ませた。魔王はその様子からだいたい事情を察する。恐らく、その岩龍という強力なモンスターが暴れ出したのだろう。だからシーカーたちはこんなにも動揺しているし、モンスターたちも様子がおかしかったのだ。

魔王がそこまで考えを及ぼしているうちにシェリカが回復した。まだ若干違和感があるが、おおよそいつもの様子に戻っている。だが、その顔は歪められたままだった。

「五十階に行く前に私はレベルを上げて鍛えなきゃね。あと、仲間も集める必要があるそう……」

シェリカはそうしんみりとつぶやいた。すると、魔王はよく考えたあとゆっくりと頷いたのだった。

第十話 仲間の必要性？（後書き）

やっぱり展開に無理があったかなあ……。でも後悔はしてませんよ。

第十一話 仲間募集中!

第十一話 仲間募集中!

朝日に染まる迷宮都市。その北部に佇むシェリカの家の食堂で、魔王とシェリカは朝食を取りながら話し合っていた。

「魔王、今日からしばらく探索は休んでパーティーメンバーを募集しましょ。いくらあんたが強くて二人じゃ岩龍を倒せないわ」

「たしかに相手の力がわからない以上、備えは必要かもしれん」

パンをミルクで流し込むと、シェリカはそう言った。その言葉に魔王は腕を組み、考え込んだ後で答えた。彼はよもや自分が負けるとは思っていなかったが、万が一が起きるのが戦いだ。なのでとりあえずシェリカの提案に従っておこうと思った。魔王は意外にも慎重な性格をしているのだ。

魔王の返事を聞いたシェリカは、何かチラシのような紙をテーブルの下から取り出した。そしてそれを魔王に手渡す。受け取った魔王はそのチラシらしき物にサッと目を走らせた。

「パーティーメンバー募集中……か。具体的なことが書いてないが良いのか？」

魔王はシェリカに不安そうな目を向けた。シェリカが渡した紙には『パーティーメンバー募集中! 詳しいことは一番通り八番地のシェリカ宅まで』としか書かれていなかったのだ。

「詳しいことを書くこうにも、紙に書くような実績がないじゃない」

シェリカはそう言ってふうっとため息をついた。魔王はたしかにそうだと言葉に詰まる。その魔王の様子にシェリカはニヤッと笑った。

「ま、そんなこと気にしないでいいわよ。チラシに頼れない分は私達が直接勧誘すれば良いんだから」

「たしかにそうだ」

魔王は目を細め、微笑んだ。それにシェリカも頷く。そうして二人は話し合いを終えると、朝食を片付け、出かけていったのだった。

★★★★★★

シーカーたちで今日も混み合うシーカー克蘭。その片隅にある掲示板に、シェリカと魔王はチラシを貼っていた。魔王がチラシを抑え、シェリカがその四隅をピンで固定していく。

「これでよし！ さあ、勧誘しに行くわよ！」

ピンでチラシを固定したシェリカはそう宣言した。威勢の良い声が辺りの喧騒にも負けずに響く。

すると、それを聞き付けたのかシーカーの集団が近づいてきた。その集団の先頭には細雪のような白髪の女が立っている。その女の翡翠色の怪しい瞳の輝きと、気味の悪い笑みは間違いないユリアスの物であった。

「おやおやシェリカさん。新しいギルドでも旗揚げなさるおつもりですか？」

「ええそうよ。仲間が必要になってね」

シェリカはユリアスにぶっきらぼうな態度で答えた。ユリアスはその答えに大袈裟に得心したように息をつく。

「なるほど。そういえば五十階の岩龍が目覚めたとか騒がしいですからねえ。岩龍と戦うための仲間集めというわけですか。でもどうです、私達の仲間になってみませんか？ わざわざ戦わなくても先へ進めますよ」

ユリアスは赤ん坊をあやすような声でシェリカに問い掛けた。しかし、シェリカはその問いに頬を紅潮させた。額に血管が浮かび、苛立ちが見て取れる。

「結構よ、入らないわ。……ほら魔王、神殿に行くわよ。まずは神官を勧誘しなきゃ」

シェリカはユリアスにそう吐き捨てると、魔王を連れて神殿の方に向かった。シェリカはいらついているからかずかずか大股で通路を歩き、神殿の中に入っていく。

その様子を、ユリアスは気味の悪い微笑みで見送ったのだった。

「ああもう、いらいらする！ あいつ絶対何かやってるわよ！」

「ありえなくはないな」

神殿に入り、ユリアスの姿が見えなくなるとすぐにいらいらをぶちまけるシェリカ。それにたいして魔王は適当な相槌をうつだけだ。石造りの神殿に、シェリカの愚痴がこだました。

「静かに。問題が起きたら私がめんどくさいのよ」

シェリカと魔王の前にいつかの黒い神官が現れた。彼女はどことなくだるそうに二人のマナーの悪さを注意する。二人は恥ずかしさで顔を赤らめて、すぐに黙った。

「ふふ、それでよろしい」

神官はにつこり笑って満足そうにそう告げると、神殿の奥へと去っていった。神官がいなくなるとシェリカと魔王は一息ついて、気を取り直す。

「恥ずかしかった……。さてと魔王、神官を勧誘するわよ。私があつちに行くからあんたはあつちで頼むわ」

シェリカが魔王と反対側を指差していった。魔王はそれに深く頷いて了解する。二人は二手に別れて歩き出し、神官の勧誘を始めた。

「はあ……なかなか難しいわね……あんたの方は？」

数時間後、シェリカがくたびれたような顔をして戻ってきた。力の抜けたような様子からして、勧誘は上手くはいかなかったようだ。それにたいする魔王もろくな結果ではなく、肩をすくめて首を横に振る。

「はあ……」

二人の口から同時にため息が漏れた。あきらめにも似た停滞感が二人を覆う。不安だけが今の二人の友達だった。

「あなたたちまだいたのね」

さっきの神官が二人に声を掛けてきた。声には少しの呆れと、何をしているのかという興味が多分に含まれていた。

「さっきの神官さん？　実は私達……」

シェリカが神官の質問に自分達の事情の説明を始めた。岩龍が目覚めたこと、自分達がそれと戦うべく仲間を集めていること……シェリカがそういった事柄をある程度神官に話してしまった。

すると神官は口元を抑え、くすくすと笑いだした。とても神に仕える者とは思えない底知れない笑いだった。

「くすくす……面白そうだわ。その仲間の話は私が受けてあげる」

シェリカが説明を全て終えたところで、神官はニタニタとしながらそう言った。カラカラと涼やかな神官の声が、人の少ない神殿によく通った。

第十一話 仲間募集中! (後書き)

感想・評価お願いします!

第十二話 新たな仲間候補

第十二話 新たな仲間候補

太陽が少し傾いてきたお昼過ぎ。迷宮都市の神殿の中で、魔王とシェリカは固まっていた。二人は石になったように動かない。それを神官の少女が奇異な眼差しで見ていた。

「どうしたの？ この私が仲間になってあげても良いって言うてるのよ」

少女はからかうように、やたらと偉そうな態度で言った。それについてシェリカは苦笑いをして応えた。

「……こいつと相談するから少し待っててね」

シェリカは魔王を引っ張り通路の端に移動した。そして魔王と額を寄せると、ひそひそと話し合いを始める。もちろん、少女に聞き取られないように細心の注意を払いながらだ。

「あの子、仲間にして大丈夫かしら？ どこからどうみても腹黒いわよ」

「余にもそのように見えるが……他にいないのだから仕方ないだろう」

「うう、そこを言われると……妥協せざるおえないわね」

話し合いはものの十秒で終わった。そもそも残念なことだが、話

し合う余地などなかったのだ。シェリカは燃え尽きたような顔を
して神官少女に向き合った。

「ありがたく仲間に迎えさせてもらうことにしたわ。私はシェリカ、
こっちが魔王。これからよろしくね！」

シェリカは満面の営業スマイルを浮かべて、空元気いっぱい
に挨拶した。それに続いて魔王も会釈をする。すると、神官の少女も
また花が咲いたような笑顔で答えた。ただし、ニコツではなくニタツ
といった笑顔だったのだが。

「私はシア。よろしく。……ふふふ」

二人はどことなくぎこちない握手をした。その後、シアは魔王と
も握手をする。三人は顔をほころばせ、柔らかに微笑んだ。

こうして三人は曲がりなりにも仲間になったのだった。

★★★★★★

夕刻近づく迷宮都市。その南の地区に魔王とシェリカは来ていた。
さらにシアも神殿にさっさと届け出を出して二人について来ていた。
シーカーの支援も仕事としている神殿は、シアのシーカーになると
いう届け出も修行の一貫としてすぐに受理してくれたのだ。だがそ
れでも手続きに丸一日はかかるはずなのだが……。不良神官シアは
仕事をサボったらしい。

三人が来ていた南地区は、通りの石畳みは剥がれ地面が露出して
いた。さらに周囲の建物は煉瓦が欠け放題、壁に落書きはされ放題。
いかにもならず者らしき人の行き来するそこは、まさにスラムとい

うのに相応しい場所だった。

「本当にこんなところに有望なシーカーなんているの？」

シェリカが疑わしげな顔をしてシアに尋ねた。三人がこんなところに来ていたのは、シアの情報があつたからだ。いわく、仲間になつてくれそうな有望なシーカーがいると。

「くすくす……これだから凡人はダメ。こういうところだからこそののよ」

シアは眉を歪めて自信たっぷりにそう言った。シェリカも魔王もその様子にそういうものかと一応納得する。

三人がそうしてしばらく通りを歩いていると、一軒の宿が見えてきた。壁に落書きがされていて、木の看板は苔が生えている上に傾いている。その看板にはかすれた文字で『ペガサス亭』と書かれていた。

「確かここよ」

シアが外れかかった宿の扉を指差して言った。シェリカと魔王はぼろくて倒壊寸前の宿の様子に顔をしかめる。まだ、シェリカの方が数段ましだった。

「本当にここなの？ ……というか営業自体してるのここ？」

「営業はしているようだぞ。中から声が聞こえるし、酒の臭いもある」

優れた感覚で人の気配を感じた魔王は嫌な顔をしながらもシェリカにそう告げた。シェリカは信じられないといった顔をしたあと、ため息をつく。

魔王とシェリカがうんざりとしているうちに、シアが中に入ろうとした。すると、中から怒号が響いてきた。シアは思わず扉から後ずさった。

「おいこらてめえ、なに人の服に水をかけてくれてんだおらあ！」

「それはそっちの言い掛かりだ。私は知らん」

「ああん？ なめとんのかわれえ！ 外に出やがれ！」

一際大きな叫びとともに、女が外に突き飛ばされてきた。継ぎ接ぎだらけの紅の着物と藍の袴を着た女だ。彼女は長い黒髪を肩に流すと、吊り目がちな目で宿の中を睨む。すると、中から大男が出てきた。男は着物の女よりも頭二つ分ほど背が高く、がっしりと筋肉のついた身体をしている。

男は下品な笑いを浮かべ、剣を手でぶらぶらとさせていた。それを女は貫くような眼差しで睨んでいる。まさに一触即発。いつ戦いが始まってもおかしくない。

「た、大変！ 魔王、助けるわよ！」

「待て、あの女はできる。わざわざ我々が手を出すまでもない」

魔王はそういうと唇を少し上げて微笑んだ。シアも着物の女について何か知っているのか、ニタニタと笑っているだけだ。シェリカ

は二人の様子に、助けに行くことをやめて見守ることにした。

「サクラ、お前の腰にあるのが刀じゃなくてただの竹の棒だって俺は知ってんだぜ？ 痛い目みたくなかったらさっさと金払いやがれ」

男が女ことサクラの腰の刀を指差して、大笑いしながら手を出した。金を手に握らせろということのようだ。しかし、サクラはその手を払い退けた。

「誰がお前などに金を払うものか」

「いいやがったな！ 後悔してももう遅いぜ！」

男は大きく剣を振りかぶった。サクラも腰に手をかけ、刀を少しだけ引きだす。だが、鞘から見えたのは銀色の輝きではなく茶色の物体だった。

「マジでそれでやり合うつもりか？ まあいいぜ、お前が怪我するだけだからな！」

男は気合いと共に剣を振り下ろした。人の背丈ほどもあるうかという巨大な鋼の塊が空を切り、唸る。その重量に見合う破壊力を持つであろう剣が女に向かって突き進んでいった。だが、女はそれを見据えても逃げることはなかった。

シェリカはその脳裏を過ぎった女の末路に耐え兼ね、目を閉じた。キシンと鉄がぶつかったような音が彼女の耳をつく。その直後、地面に何かが落ちたような音もした。

「そんな馬鹿な……嘘だろ……」

しばらくして男のつぶやくような弱々しい声が聞こえてきた。シエリカはその声に、何事かと固く閉じていた目を開ける。すると……

「なんで剣が真っ二つになってんのよ……」

中心を、くつつけたらまた一つに戻りそうなほど美しく分かれた剣。それを見て地面にへたれこみ、口をばくばくさせている男。そしてそれを見下ろしているサクラ。シエリカの目にありえない光景が飛び込んで来たのであった。

第十二話 新たな仲間候補（後書き）

強い新キャラ登場です。個人的にはこういうキャラ好きなんですよね。でもちよつと強くしすぎたかもです。

第十三話 侍とギルド（前書き）

評価ポイントがすごい伸びです。読者の皆さんありがとうございます！

第十三話 侍とギルド

第十三話 侍とギルド

夕闇迫るスラム街。ヒヤリと風が吹き抜けるその真っ只中に、魔王たち三人はいた。三人とも、前方にいるサクラと大男の様子に視線が釘付けだ。

「ゆっ許してくれよ……なっ頼む！」

自慢の剣を斬られた大男は、地面に頭を擦りつけていた。その大きな身体が卑屈に小さくなっているのは、いかにも哀愁が漂っている。

大男の情けない姿にサクラは何も言わずに竹光をしまった。その目は呆れたようだった。助かった大男はサクラにヘイコラ頭を下げて走り去っていく。

「まったく。困った奴らだ」

サクラは肩をすくめてため息をつく、宿の中へと戻っていこうとする。そこでシアがサクラの肩を叩き、声をかけた。

「サクラ」

「おおっ！？ これは神官殿。……すまないが金の都合はまだ……」

サクラはシアに気がつく、頭を下げた。そして、両手で拝むようにして、上目遣いでシアを見る。二人はどうやら知り合いのようだ。

った。しかもサクラはシアに頭が上がりないらしい。

「今日は別に金の催促に来たんじゃないわ。ほら、二人ともこっちに来て」

シアはサクラに顔を上げさせると、魔王たちを呼んだ。サクラは近づいてきた魔王たちをきよとした表情で迎える。

「この方たちは？」

「私のシーカー仲間よ。今一緒にギルドを立ち上げようとしているの。こっちがシェリカで、こっちが魔王。仲良くして」

シアは二人の紹介を簡単にした。それにサクラは納得すると、乱れていた着物を整えて自身も自己紹介をする。

「そうか。私はサクラ、東方から来た侍だ。修行の旅であちこちを巡っていて今はこの街でシーカーをしている……と言いたところだが、荷物を置き引きされてしまったな。見ての通りだ」

サクラはそういうと顔を俯けてしまった。嫌なことを思い出してしまったようだ。場が何となく気まずい雰囲気となり、四人は沈黙した。しばらくして、沈黙に耐え兼ねたシェリカが場の空気を変え、なるべく話を切り出す。

「……えーと、サクラさんだっけ。今、シアも言ったと思うけど私たち仲間を探しているの。あなた強そうだし、仲間になってくれなにかしら」

シェリカの言葉にサクラは押し黙った。提案を受けるべきかどうかどう

か考えているようだ。そこへ、魔王も追い撃ちをかける。

「余は別に仲間になれとは言わぬ。だが、そなたほどの者がここで埋もれておるのをもったいないとは思うがな」

魔王の言葉が重々しい響きをもってサクラの心に染み入った。すると、サクラの目が変わった。自信を失っていた瞳が光を取り戻す。

「わかった。このサクラ、武士道に誓ってそなたらの仲間となろう」

サクラはそう仰々しく宣言したあと、はにかんだような笑顔を見せた。三人もそれに微笑みで応える。

こうして、また新たな仲間が増えたのであった。

★★★★★★

迷宮都市の北地区。貴族街と呼ばれるこの地区の端にシェリカの家はある。シアもサクラも今日からここに泊まることになった。しかし……

「ひどい……詐欺なの。貴族街の家なんて言うから期待してたのに……。とつてもか弱い私にこんな劣悪な環境で暮らせというのね」

「すっ、すばらしい家だな！ えっと……とにかくすばらしい家だ！」

ボロボロの屋敷の様子に、嘘泣きをしてごねるシアに強張った顔で必死に褒めるところを探すサクラ。その様子に、シェリカは額に指を当てて呆れた。

「はあ、騒いでも家は立派にはならないわよ。ほら、さっさと入るわよ。いい加減あきらめなさい」

「むう……儲かったら手入れさせてもらうわ」

きっぱりとした態度で言い切ったシェリカに、シアも膨れながらもあきらめた。サクラも引き気味になりながら家の門をくぐり抜ける。

その後、シアが恨み言を言ったり騒いだりした。だが、それ以外はおおむね無事に四人は朝を迎えたのであった。

「あと一人必要ね。誰かいないかなあ」

翌朝の食堂。朝食をとっていた三人に、シェリカがパンを片手につぶやいた。それにシアとサクラが頷いて応える。すると、魔王がシェリカに尋ねた。

「何があと一人必要なのだ？」

「何がってそれは……あんだだったわね」

シェリカは魔王が並外れた世間知らずなことを思い出した。最近、少しはマシになっていたので忘れかけていたのだ。

「えーとね、ギルドの設立には五人が必要なのよ。だからあと一人なの」

「ふむ、そうか。だがそのギルドというのは設立すると何か良いこ

とでもあるのか」

「もちろん。専用の施設を使えるようになったりとか、武道大会に出場できるようになったりとか。それに、強いギルドを設立するのはシーカーのロマンなの！」

シェリカは強い語気で言い切った。魔王はその言葉にふむふむと頷く。するとシアが自らのクランカードを取り出して言った。

「ギルドを設立するのは良いわ。けれど、まだ私たち互いのカードを交換してないわね。あと一人、集める前に交換しておきましょう」

「確かにそれもそうだ。交換しようじゃないか」

サクラとシアは互いのカードを交換した。そして、シェリカと魔王の方を見る。するとシェリカの顔がたちまち険しくなった。

「良いけど……何を見ても騒がないでよ」

「何を言うのだ。別に私は騒ぎやしないぞ」

「何が書いてあるのかしら……面白そう」

眼光鋭いシェリカに、二人は軽い態度のままだった。シェリカは少々不安になったが、魔王と共にカードを交換する。

「冗談が好きなのね……」

魔王のカードを受け取ったシアが固まった。青い顔をして唇を震わせている。サクラは何が書いてあったのかと覗き込んだ。

「私にも見せてくれ……ひよえ！」

サクラもまた奇声を上げて固まった。こうして、シェリカの家の食堂が大変なことになったのだった。

第十四話 最強の服屋

第十四話 最強の服屋

朝日にサンサンと照らされたシェリカの家。その食堂で、シアとシェリカは疲れた顔をしていた。

「さっさと認めたら？ その方が楽になるわよ」

魔王について半ば達観しているシェリカがシアに諭すように語りかけた。シアは気の抜けたような表情でコクリと頷く。もはやいろいろあきらめたらしい。

一方、サクラは魔王を愕然とした顔で見つめていた。彼の顔や身体を隅から隅まで舐めるように見つめている。そして疲れ果てたように息をついた。

「無駄のない身体つきに漂う強者の気配。嘘ではないようだ……」

サクラは魔王をひとしきり観察した結果、レベル五百というのは本当のようだと思った。気配や身体つきが常人とはわずかではあるが違ふのだ。

「二人ともわかったようね。なら今から買い物に行くわよ」

シェリカは二人が落ち着いたことを確認すると、高らかにそう宣言した。それにたいして魔王が怪訝な顔をする。

「仲間探しはどうするのだ？ あと一人足りぬのであろう？」

「あんたねえ、サクラにあんな格好で仲間探しをさせるつもり？
みっともないわよ」

シェリカはサクラをちらつと見たあとで魔王にたしなめるように言った。その言われように顔を赤くして怒鳴ろうとするサクラ。しかし、彼女がそれをするとはなかった。

「悔しいが文句が言えん……」

継ぎ接ぎだらけでくたびれたような着物に袴。それらはもう何日も洗われていないのか、汗で黄ばんでいた。さらに、ろくに舗装もなされていない場所で生活していたためか砂などがこびりついている。

サクラ自身は清潔なようだが、正直近づくのはご遠慮願いたいような格好を彼女はしていた。

「じゃあ行きましょう。買い物のお金は私がサクラに貸すわ。十日で一割で勘弁してあげる」

シアが懐からひよこの形をした財布を取り出した。財布はパンパンに膨れていて、ひよこのはずがニワトリのような大きさだ。

シアがその財布のがま口を開けると、中には金色の硬貨が溢れ出しそうなほど詰まっていた。驚いたことに、財布の中身は全部金貨らしい。

「あんたどうやってそれだけの金を稼いだのよ……」

「皆様からのお志を私が少しずつ貯めた。でも大丈夫、運用して増やして戻すもの」

シアはシェリカの質問にさらりと答えた。悪いとはまったく思っていないらしい。シェリカは神官の恐ろしさを垣間見たような気がした。

「サクラ、お金は私が払ってあげるわ。シアからは借りちゃだめよ」

シェリカはしばらくしてそうつぶやくように言った。それにサクラは黙って頷いたのだった。

★★★★★★

迷宮都市を中心に横切る大通り。そこはいつでも混沌とした賑わいを見せていた。広い通りにテントの露店商からしっかりした店構えの少し高級店、さらには怪しげな店まで様々な店が軒を連ねていた。そこに行き交う人も同様にシーカーから近所のおばさん、小金持ちのオッサンまで実に種類が豊富である。

「なかなか賑やかなところだな」

「ええ、この迷宮都市の中心だからね」

初めてここに来た魔王は感心したように辺りに見回していた。魔界にはこれだけの活気がある場所などなかったのだ。なので、彼は興味の赴くまま視線をあちこちに飛ばしている。

シアやサクラも普段はあまりこないのか、魔王と似たような感じでキョロキョロとしていた。

「おっ、あの店など良さそうではないか？」

そうやって通りを歩いていると、サクラが一軒の店を指差した。その軒先にはたくさんさんの服がかけられていて、中にはサクラの着ているのと似たような着物があつた。サクラはそれをたまたま見つけたようだった。

「サクラが良いって言うならあそこにしましょ。魔王もシアもそれで良い？」

「私は別にどこでも構わないわ」

「余も特にこだわりなどはないな。好きにするが良い」

「そう、じゃ決定ね」

シェリカは二人の返事を聞くと、雑踏を越えて早速店へと足を踏み込んだ。魔王たちもまたぞろぞろとその後に続いていく。

店内はところせましと服やら鎧やらアクセサリーやらが積まれていて、移動にも苦労するほどであつた。およそ着ることに関する物を全て集めたかのように、統一感が感じられない。

「すいませーん、誰かいませんか？」

店主の姿が見当たらなかったので、シェリカが声を張り上げた。すると、どたばたと足音を踏み鳴らしながら店主が現れた。店主は天井が低く見えるほどの大男で、異様な風体をしていた。

彼は女物と思われるピッタリサイズのワンピースを着て、頭は紫色に染めていた。髭の剃り後の残る顔には派手な化粧をしていて、全身から甘ったるい香水の匂いを漂わせている。

四人はそのある種の迫力に圧倒されて言葉も出なかった。

「ようこそ、服飾の店マリーへ！ 歓迎するわ」

「ど、どうも。この子の着物を探しに来たんですけど……」

シェリカは片言で用件を伝え、サクラの肩をポンと叩いた。すると、店主はサクラの身体を入念に見つめた。サクラはその目つきと迫力に身体を強張らせる。

「着物じゃちょっと身体のラインがわからないわね。触ってもいいかしらん？」

「はっ、はいもちろん」

サクラが質問にひっくり返ったような声で答えると、店主はサクラの身体を触り出した。指輪をじゃらじゃらと嵌めたゴツい手で揉むように触っていく。

「あなたやっぱすごい身体してるわねえ。触ってよかったわん。目測でサイズを決めてたらおっぱいの部分がはちきれてたわよん」

「はあ……そうなのですか」

一通りサイズを確認した店主はサクラの胸の膨らみをたぶたと揺らして笑った。しかし、サクラはすでに上の空。セクハラを気に

するゆとりすらなかった。

「サイズも測ったし、さっさと服を決めましょうね。ああでもこんなサイズは倉庫にしかないわね。しょうがない、みんなついて来て」

店主はサクラを強制連行しながら奥に引っ込んでいくと、残った三人を呼んだ。シェリカたちは覚悟を決めて歩き出す。しかし、一人だけ歩き出さない者がいた。

「魔王、ついて来ないつもりなの？」

シェリカが魔王にたいして恨みがましく言った。すると魔王はにべもない返事を返す。

「余は男だからな。女の服を選ぶのについて行くのは不自然であろう」

魔王の意見はごくごく普通であった。なのでシェリカとシアは殺気の籠った目つきで睨むものの、反論はできなかった。

「では、余は街を散策してくるからな。しばらくしたらまた戻ってくる」

魔王はシェリカたちにそう告げるとマリーの店からそくさと立ち去った。そして店から少し離れたところでようやく一息つく。

「あれはあれで……勇者などよりもよほど危険だったな」

魔王はかつての勇者たちを思い出しながら、しみじみとそうつぶ

やいたのであった。

第十四話 最強の服屋（後書き）

服屋のどこが最強なのかはお察しを（笑）

第十五話 予言

第十五話 予言

陽射しに照らされた迷宮都市の大通りを、魔王はあてもなくぶらついていた。雑踏の中を速くなったり遅くなったりしながら、気のむくままに歩いている。

「うぬ？」

しばらくすると、不意に妙な魔力を感じた魔王は足を止めた。そして通りの脇にある小さな店の中に入っていく。店の入口の扉が軋み、微かに埃が舞った。

店の中には濃密な魔力が漂っていた。足元さえおぼつかないほど暗い店の中を、魔力特有のぬめるような気配が満ちたしている。

魔王はどこから魔力が発生しているのかと、注意深く店の中を観察した。端に置かれた揺らめく蝋燭に、店の中心に鎮座している水晶球。いちいち怪しいこれらを魔王は一つ一つ見てまわった。

「おや、いらっしやい。変わった気配のお方が来たもんだねえ」

魔王が店の中を見ていると、奥の扉から老婆が出てきた。その腰は曲がり、手足は枯れ木のよう。顔には溪谷のごときしわが刻み込まれていて、百年は生きていそうであった。

「そなたがこの店の店主か？」

「ほほ、そうですよ。わしが店主のアガリアじゃ」

老婆はしがわれかすれた声で名乗ると、水晶球の前の椅子に座り込んだ。そして、魔王に向かってにんまりと微笑む。

「何か占って欲しいことがあるだろう？　そうだね、その顔だと人を探しているね？」

老婆はからかうような調子でそういった。その言葉に魔王は愉快そうに唇を歪める。言葉は見事的中していたのだ。

「確かに人を探している。だがすまないな、今は手持ちがないゆえ占ってもらうことはできぬ」

魔王は少し残念そうに言うと、店から出て行こうとした。だが、それを老婆が止める。その口調は穏やかだったが強かった。

「待っておくれ、お代ならいらないよ。あんたは面白そうだからね、特別にタダだよ」

「それはありがたい。頼むでしょう」

魔王は申し出を受け入れ、老婆の向かい側の椅子に座った。すると、老婆が水晶を貫かんばかりに睨みつける。

「この水晶をじっと見ておくれ。それだけで良いからの」

「こうか？」

魔王は水晶を正面に見据えた。すると、吸い込まれるような感覚

が魔王を襲う。それはちょうど眠りに落ちるような感じで、不思議と不快ではない。

「ふむ、見えてきたぞい。どうやらあんたは仲間を探しておるようじゃな。あつておるか？」

「ああ、そうだ」

「では続けよう。あんたの仲間となる者はどうやら女の子のようじやの。なかなかの別嬪さんが見えるぞ。それで肝心の今おる場所は……なんじゃ、すぐ近くではないか。この通りを西に数分歩いたところにおるようだ」

老婆はそれだけのことを魔王に告げると、目を水晶から放して占いを終えようとした。魔王も不思議な感覚から解放され、立ち上がろうとする。

だがここで、老婆の顔つきが変わった。眼光は鋭くなり、口はまっすぐ。その額からは一筋の汗が垂れた。魔王もそのただならぬ様子に浮かせていた腰を席に戻す。

「もやもやとした黒い何かが見える。これは……混沌かい。ううむ……」

老婆は水晶から伝わるイメージに背筋を凍らせた。得体の知れない恐怖にかられたのだ。だが、彼女は占いを辞めはしなかった。

「混沌の中心にいるのは未来のあんただね。何かと戦っているように見えるのう……」

「なぬ、余は何と戦っているのだ？」

魔王が少々興奮した口調で老婆に迫った。老婆は魔王の期待に応えるべく水晶をさらに覗き込む。しかし次の瞬間、彼女は頭を抱えることとなった。

「すまんの、はっきりと見えぬ。わしの力の及ばぬ存在のようだ」

老婆は肩をすくめると、魔王に申し訳なさそうに言った。魔王は少しがっかりしたようにため息をついた。

「そうか。ならばせめて他のことはわからぬのか？」

「ふうむ、どれ少し頑張ってみるか」

魔王に促された老婆は再び水晶を見つめ、神秘の世界に身を投じた。彼女の頭の中にまた新たなイメージが現れてくる。

「槍と杯が見えるね。相当古い物のようだ。ところどころに錆なんかが浮いて変色してる。……この二つがあんたの将来に深く関わるようだね……」

魔王は老婆の予言に頭を捻った。彼は武器として槍を使うこともないし、杯で酒を飲むこともあまりない。二つとも縁がないのだ。

だが、老婆の予言は訝しげな顔をしている魔王を無視して続けた。まるで何かに憑かれているようであった。

「槍はあんたが後々どこかで手に入れるようだ。でもどこで手に入るのかまではわしにはわからないよ。杯の方はもう誰かが持って

いるようだね。……うーん、持ち主はわからない。ただ、この二つを合わせると何かが起きるようだ」

老婆は意味ありげな言葉を最後に言って顔を上げた。そして、険しい顔で魔王の瞳を見る。魔王もまた姿勢を正した。

「ざっとこんなところだね。これ以上はどう頑張っても無理だよ。まあせいぜい、気をつけておくれよ」

「世話をかけたな、礼を言うぞ」

魔王は老婆にもうし訳なさそうに礼を言う。すると、老婆はこれまでの険しい顔から一転して豪快に笑った。

「良いのさ、わしが好きでやったことだから。それより早くおゆき、未来の仲間が待ってるよ」

老婆はそういうと席を立ち、店の奥に戻って行った。魔王もまた席を立ち、老婆に言われた場所へと向かうのであった。

第十六話 マップメーカー（前書き）

いつのまにか十万PV突破！
ありがとうございます！

第十六話 マップメーカー

第十六話 マップメーカー

けだるい昼下がり。うつとうしいほどに太陽が輝いている。だがここ迷宮都市の商店街では、そんな元氣過ぎるお天道様にも負けないう活気が満ちていた。しかし、その片隅の店で一人の少女がどんよりとした雰囲気醸し出していた。

「あかん、今日も売上が全然ないで……」

テーブルの上に置かれた数枚の銅貨と大量の地図。少女は栗色の髪を髪をかきあげ、がつくりと肩を落とした。

少女の名前はエルマ。この店で地図を売るマップメーカーである。マップメーカーというのは迷宮に潜って地図を作り、それを売る者のことだ。だがそんな彼女は今、生活の危機に直面していた。

「ふう、あんなわけわからんモンスターさえでなければなあ……」

エルマは遠い目をして忌ま忌ましげにつぶやいた。五十階層に現れた岩龍というモンスター。このモンスターのせいで彼女はうまくいっていなかった。

彼女が入っていたパーティーは岩龍を恐れ、五十階層を目前に事実上解散。仕方なく彼女自身も新しいパーティーまたはギルドに所属しようとしたが、中途半端なレベルのせいで仲間ができなかった。しかも彼女はサポート担当だったので一人では潜ることもままならない。

なので今まで作りためた地図を売っているのだが、低い階層の地図のため売れ行きは低調そのもの。これではため息の一つや二つ出ようというものである。

「じゃあない、もういっぺんクランで仲間を探してみるか……」

思い立ったらすぐ実行。エルマはテーブルをバンと叩くと、店を畳む準備を始めた。地図を丁寧にしまい、準備中と書かれた札を手取る。

するとここで重苦しい空気で満ちていた店内に、爽やかな風が吹き込んできた。エルマは頬を撫でた風に入口の方に振り向く。

男が立っていた。鮮やかな紅のマントを着て、つやつやと輝く漆黒の杖を持っている。その色白で涼やかな顔は間違いなく魔王のものであった。

「いらっしやい！　うちの商品は全品良心価格や！　たくさん買っ
ていってな！」

エルマは丸められた地図をすばやく広げると、満面の笑みを浮かべた。すると魔王は少々申し訳なさそうな顔をする。

「悪いが余は客ではない。人を探していてな、立ち寄っただけだ。
……すまぬがこの辺りでかわいい娘を知らぬか？」

「なんや……」

エルマはくたびれたように座り込んだ。そして、指でまっすぐ前

を指差す。その指はちょうど、向かいの店を指していた。

「向かいのランド商店、そのマゼンダお嬢様がここらで一番美人や」

「そうか、世話になった。そのうちに何か買いに来ることを約束しよう」

魔王はエルマにくるりと背を向けて歩き出した。エルマは疲れたように椅子に身体を埋める。

しかしここで、エルマの頭でパチッと何かがひらめいた。彼女は慌てて店から出て行こうとする魔王を呼び止める。

「ごめん、ちょっと待ってくれへん。今気づいたんやけどな、かわいい女の子なんかをどうして探してるんや？」

「ギルドのメンバーを探していてな。占ってもらったところこの辺りのかわいい娘が仲間になると言われて」

エルマの目の色がにわかに熱を帯びた。彼女は魔王に近づき、上目遣いに彼の瞳を見つめる。

「前言撤回っ！　ここらで一番美人なのはうちや。うちを仲間にしておくんはなれ！」

「本当にそうなのか……ふうむ」

魔王はエルマの容姿を良く確認した。栗色の流れるような髪と猫のように愛らしい輪郭をしている顔。その大きな琥珀色の瞳は澄み

渡り、一点の曇りもない。さらにプロポーションも、胸元の布地が押し上げられていることなどからかなり良いようだった。

この辺りで一番の美人というのもあながち嘘ではないようだ。

「確かに美人だ。だが、そなたがさっき言っていたマゼンダという娘も気になる」

魔王はエルマが仲間かも知れないと思った。だが一応、マゼンダという娘も見えておこうと思い、店から出て行こうとする。しかし、彼が店を出ることはなかった。エルマに腕を掴まれたのだ。

「マゼンダって言うたんは遠慮つつうやつや。最初っから自分が一番なんて言うのは恥ずかしいやろ、そやから言うたんよ。うちが一番に決まっとる……だからな……」

そこからエルマの話は延々と激流のような勢いで続いた。ぺらぺらと口が動き続けて、止まることが全くない。魔王はその逆らいがたい圧倒的な勢いに徐々に飲み込まれていった。

「……でな、マゼンダの胸はほとんど詰め物なんやで。男が『詐欺だあゝ！ この底上げ胸ゝ！』って叫んだのを聞いたんやから！……ってしゃべり過ぎてもうたわ。こらあかん」

エルマはふと時計を見て、いつのまにかマゼンダの悪口になっていた話を終えた。すでに話を始めてから一時間が経とうとしていた。

「……良かろう。そなたを仲間にしようではないか」

魔王はポカンとしたような顔でエルマに言った。その言葉にエル

マは拳を上げて、快哉の叫びを上げる。

「やったで！　うちはエルマ、マップメーカーや。ほなこれからよろしくな」

「余の名は魔王、よろしく頼むぞ」

二人は互いに手を差し出し、がっちりと握手を交わした。

こうして、魔王としては騙されたような気がしなくてもなかったが、エルマが仲間になったのだった。

第十六話 マップメーカー（後書き）

念のため言っておきますとエルマの関西弁は関西弁（笑）です。
ご了承くださいね。

第十七話 結成、新ギルド（前書き）

今回でようやく一区切りです。

第十七話 結成、新ギルド

第十七話 結成新ギルド

陽射しに照らされ、魔王はエルマとともに通りを東に歩いていった。二人は人波を掻き分け、どンドンと歩いて行く。すると魔王とエルマの目に、軒先にたくさんの服を吊り下げた店が飛び込んできた。さらに、その前に立っている三人の女の子も見える。

「遅い！ 何やってたのよ。私たちもう買い物ぜーんぶ終わらせて、ここで待ってたのよ！」

魔王が三人に近づいていくと、シェリカが口を尖らせた。他の二人も時計に目をやり、呆れたような顔をしている。

「すまなかったな。いろいろとやっているうちに時間を忘れてしまったのだ」

「もう、今度からは気をつけなさいよ。それより、その女の子は誰？」

シェリカは魔王にひとしきり怒った後で、エルマに目を向けた。その容赦ない視線に、エルマはたじろぎ後ろに一步下がる。そこで魔王がエルマの前に出てエルマの紹介をした。

「この者はエルマという者だ。余が仲間候補として連れてきた」

「あら、そうなの。どっかで引っかけてきたのかと思ったじゃない」

シェリカはエルマの前に移動した。それに他の二人も続く。そして、三人はエルマに次々と質問を投げかけていった。

エルマはその質問にそつなく答えていった。三人は徐々に値踏みするような目から、納得したような目になる。

「いいんじゃないか、なかなか優秀そうぞ」

サクラが真新しい藍色の着物を揺らして、関心したように息をついた。シェリカもその意見に頷く。だがシアは少し懐疑的な表情をした。

「シア、なんでそんな顔するのよ。何か気にいらないの？」

「別にそういう訳じゃないわ。ただ……この娘からはサクラと同じ貧乏神の気配がする」

シアはひよこの財布を取り出してギュッと抱きしめた。その様子に、サクラとエルマは目を丸くする。

「むむっ、今のはさすがに我慢ならんぞ！」

「サクラはん、協力するで！ 二人であの悪徳神官を倒すんや！」

サクラとエルマは顔を真っ赤にしてアイコンタクトをした。シアはすばやくその場から逃げ出していく。

シアとサクラたちの追いかけっこが始まった。追いかけるサクラとエルマに逃げるシア。三人は混み合う人々の間をすり抜け、通りを縦横無尽に駆けていく。

やがて周囲に迷惑をかける三人を止めるため、シェリカと魔王もそれに加わった。それにより追いかけてこは一層激化して、日が傾くまで続いた。

こうしているうちに、いつのまにかエルマはすっかり四人に溶け込んでいたのであった。

★★★★★★

そろそろ風が冷えてくる黄昏れ時。五人はシェリカの家の食堂に集まって会議をしていた。新たに結成するギルドのことについて話し合うためだ。ちなみに、恒例のカード交換イベントは終わっている。

「新しいギルドの名前について決めたいんだけど、何か意見のある人！」

シェリカがペンを片手にみんなに意見を聞いた。その手元には、『ギルド結成申請書』と書かれた紙が置かれている。

「ふふ、このサクラがこんなこともあるのかとすでに名前を考えておいたぞ。その名もファイナルギャラクティカナイトだああ！」

サクラが唇を吊り上げ、押し殺したように不適に笑った。そして無駄に自信たっぷり、自分のアイデアを言い放つ。そのネーミングセンスのなさにみんなの顔が固まり、場が凍りついた。食堂の中をひんやりした空気が通り抜けていった。

「馬鹿は放置。私はシア様親衛隊が良いと思う」

しばらくしてシアがサクラの提案を一蹴した。そして、自分の意見を述べる。その自己中心的過ぎる名前にシェリカをはじめとしてみんなはまた頭を抱えた。

「……この二人はダメだわ。あんたたちは何か意見ないの？」

シェリカは希望を込めた眼差しで魔王とエルマを見た。すると、魔王もエルマもそれぞれ考え込み始める。

「うちはそうやなあ……あかん、ネーミングセンスないから無理や」

考えあぐねたエルマは、そう言ってシェリカの方を見た。シェリカは両手を上げて、お手上げというポーズを取る。彼女もまたネーミングには自信がないようだった。

「深層へ至る者、などどうだろう」

魔王がぼそつとつぶやいた。みんなは話すのを止めて、食堂は水を打ったようになった。今までで唯一、まともな名前だった。

「大げさだけど良いかも。みんなはどう？」

シェリカはみんなに確認を取った。シアとサクラがどこことなく不満そうではあったが、反対意見はでなかった。

「よし、名前は『深層へ至る者』に決定！」

シェリカは書類にササツと名前を記入して、次の空欄を見た。そこには『代表者名』と書かれていた。

「次はリーダーを決めなきゃいけないみたいね。みんな、誰が良いと思う？」

シェリカはみんなの顔を見渡して言った。するとみんなは一斉にシェリカの顔を見る。シェリカはその反応に戸惑ってしまった。実はこのメンバーの中では彼女が一番レベルが低いのだ。

「わっ、私！ それは無理よ！ そりゃさ、こうやってみんなをまとめるかも知れないけど……レベルが低くてあてにならないんだから。それよりも魔王とかどうなの？」

困惑したシェリカは魔王の方に目を向けた。他の三人もそれにつられて魔王を見る。魔王は少し唸ったが、何も言わなかった。

「レベルが高い方がリーダーに向いているのは事実。魔王はそういう点では問題ないわ」

しばらくしてシアはそうつぶやいた。その一言に、他の二人は唸らされる。二人とも魔王の実力についてはリーダーに相応しいと思っていたのだ。シェリカが乗り気でない以上、魔王が最適かもしれない。そんな考えがにわかに広まった。

「皆が推すのであれば、引き受けよう」

魔王は周囲の雰囲気を感じて、リーダーを引き受けることにした。その言葉にみんなは笑顔になり、シェリカは魔王に書類とペンを手渡す。魔王は渡された書類につらつらと長い長い本名を記入していた。

「最後にそれぞれの血判を押さねばならぬようだな。誰かナイフを持っておるか？」

「ナイフなら私が持ってるわ、はい」

魔王が書類の下のスぺースを見て言った。シェリカがすかさずナイフを魔王に手渡す。すると魔王は親指を切り、紙に押し当てた。紅の指紋がはっきりと紙に残る。それを確認したところで、魔王は隣のエルマにナイフと紙を手渡した。

エルマは切りすぎたのか、痛みに顔をしかめつつも血判を押した。その後、残りのメンバーは粛々と血判を押していく。そしてついに、最後であるシェリカに順番が回ってきた。

「いよいよ最後ね。みんな、本当に後悔とかない？　今ならまだやめれるわよ」

シェリカは最後の確認をした。みんなは黙っている。それは明らかにシェリカが血判を押すことを肯定していた。

「つつう……これでよし！」

シェリカは血を指からにじませ、力いっぱい紙に押し付けた。そして、ゆっくりと指を紙から離していく。紙には五つの血判が赤々と残されていた。

今ここに、新たなギルドが結成されたのであった。

第十七話 結成、新ギルド（後書き）

ネーミングが……作者もサクラほどではないですが残念です……。センスのある方を本当に尊敬します。

第十八話 初陣

第十八話 初陣

ギルド『深層へ至る者』結成から二日が経過した。その日、雫が石に滴り落ち澄んだ音を奏でる迷宮第四十五階層を、五人のシーカーが探索していた。前を歩く赤髪の剣士に藍色の着物を纏った侍、後方を歩く大きな帽子を頭に載せた神官に地図とペンを手にしたマッメーカー。そして、そのさらに後ろを貴族風の男が続いていく。間違いなく魔王たちであった。

彼らは今日、五人で初めての探索に臨んでいた。うまく戦えるのか、連携できるのか。岩龍に備えた訓練のつもりとはいえ、少なからぬ不安が彼らを付き纏っていた。

「いきなり四十五階層なんて大丈夫かしら……」

最前列を歩くシェリカが不安げな顔をした。五人で初めての探索、しかも四十五階層は彼女にとっては未知の階層である。彼女は他の誰よりも不安でいっぱいであった。

「大丈夫だ、私やみんながいるじゃないか」

サクラがシェリカの独り言を聞き付けて、任せておけと言わんばかりに胸を張った。シェリカはそれを見て、ほっと息をつく。

「それもそうね。心配することなかったわ」

シェリカが顔を上げた。わずかながら不安が軽減されたようだっ

た。するとその時、最後尾の魔王が足を止めた。そして辺りをゆっくりと見回す。

「ふむ、何か来たようだ」

魔王がつぶやくと、それ続くかのように足元がじりじりと揺れた。ほかの四人も足を止めてそれぞれの武器を構える。張り詰めた空気が辺りを支配した。

「オークか！　大きいな！」

「援護はするで！　暴れてきいや！」

「回復は任せて。さ、気持ち悪いから早く倒してきて」

天井につかえそうなほどの身体を持ったオークが、前の曲がり角から現れた。丸々と肥え太ったオークは鼻を鳴らし、ゴミのような臭いがする息を吐き出す。

五人はその臭いに思わず吐き気を感じつつも、攻撃を始めた。

「せやあっ！」

サクラの刀がにわかに光り、一閃。気を纏った刃がオークの腹を裂き、血があふれ出る。身を裂かれる痛みにオークは雄叫びを上げ、手にもつこん棒を振り回した。近づく人など軽く吹き飛ばしてしまいそうなその暴れっぷりにサクラもシェリカも後ろに下がる。

「近づけないわ！　エルマ、頼むわよ！」

「よっしゃ、任せとき！」

エルマは腰からサツと黒く輝く物体を引き抜いた。L字型をして、先端に穴が空いているその物体は魔銃と呼ばれる武器である。鉛弾の代わりに魔力を打ち出す銃だ。

エルマはそれを二丁構えると、安全装置を解除して次々と引き金を引いた。白い光が線を引き、瞬く間にオークに殺到していく。

「ぐおお！　ぎゃおお！」

「ちっ、あかん！　こいつデブやから銃があんま効かへんみたいや！」

エルマはブヨブヨとした腹に弾かれる光を見て舌打ちした。見た目は派手で使い勝手もよい魔銃だが、その威力はあまり高くはない。特に、今回のオークのような柔らかい敵には滅法弱いのだ。

結局エルマの攻撃はオークを怒らせただけであつた。前にも増して暴れ出したオークに、エルマはすぐ後ろの魔王を見る。だが、魔王は首を横に振った。

「ダメだ。余が手を出しては訓練にならぬ」

魔王は毅然とした態度で断言した。今回の探索は、ギルドでの連携を高めるためである。それに強すぎる魔王が手を加えたら成果が上がらないのだ。

「そうかいな。それならやれるだけやってみるで！」

エルマは魔銃を一丁しまい、もう片方を両手で構えた。そして神経を研ぎ澄まし、オークの顔のあたりに狙いをつける。

「バーストショットオ！」

気迫の籠った叫びが響き、エルマの銃からまばゆい閃光が放たれた。閃光はオークの右目に直撃。それをえぐり取る。血が噴き出し、オークの身体が朱に染まりゆく。

「うぎゃあああ！」

鼓膜を破壊するような堪え難い絶叫が轟いた。オークはこん棒を放りなげ、頭を抑えてのたうちまわる。

こん棒を手放したのはオークにとって致命的であった。サクラとシェリカがオークの懷に飛び込み、その身体を血に染めていく。オークは慌ててこん棒を手に取りうとしたが時すでに遅し。肉を裂かれ、ずぶ濡れになるほど血を流した身体にはこん棒を振り回すような力は残っていなかった。

「ぐう……」

オークは弱々しい断末魔のみを残し、息絶えた。その死体はあつという間に光の粒となり闇に溶けていく。後にはメロンほどの大きさの魔力珠だけが残された。

「ふふ……大きいわ。お金になりそう」

怪我人がでなかったので暇をしていたシアが、すぐに魔力珠を抱えた。そして愛おしいかのようにほお擦りをする。その頭の中はお

金のことでいっぱいだった。

「こらっ、あんたなに勝手に持つてるのよ！ それはみんなで山分けよ！」

「あっ……」

シェリカはシアに近づくと、その手から魔力珠を取り上げた。そして、腰のポーチに押し込む。シアは赤くなって頬を膨らませたが、シェリカはまったく相手にしなかった。

「まったく油断もすきもないんだから。……それよりサクラ、オークってみんなあんなに強いのか？ あたしあれが続いたら結構きついんだけど」

「えっ？ ……そうだな、少なくとも私が知る限りではあれだけ強いのは始めてだ。普通なら最初の一撃で真っ二つになっている」

サクラはしばらく考えた後、シェリカの質問に答えた。サクラとしても、オークの強さは予想外であった。

「なら良いけど……」

シェリカはサクラの答えにそう心配そうに言うと、また迷宮の中を歩き始めた。他の四人もすぐに後に続いて探索を再開する。

その後五人はオークに何度か襲われたものの、シェリカの心配したようなことにはならなかった。そして五人は四十九階層まで潜り、いよいよ次回の探索で岩龍と戦うことになったのである。

第十八話 初陣（後書き）

話の構成上仕方ないとはいえ、魔王の出番が……。今後はもっと増えるように努力します。

第十九話 開戦、巨大龍

第十九話 開戦、巨大龍

厳かな雰囲気、朝の神殿。その中央にある祈祷の間に、魔王たちは来ていた。朝日で大理石が白く輝き、中央にそびえる女神像が見下ろすそこは神聖な空気に満ちていた。

その雰囲気、魔王は仏頂面をしていた。そして、隣のシェリカを恨めしそうに見る。

「もう帰っても良いか？」

「まだお祈りしてないじゃない。大きな戦いの前に加護神様にお祈りするのはシーカーの常識よ」

「ううむ……」

シェリカは魔王の言葉にそっけなく答えると、女神像にお祈りを始めた。他の三人もそれに続く。この女神像というのは特定の神を表したのではなく、様々な神を象徴的に表している。そのため、四人が一緒にお祈りできるのだ。

他のメンバーが全員お祈りを始めたので、仕方なく魔王も混沌神に祈りだした。固く目を閉じ、胸の前で手を組む。そしてしばらくの間、心を無にした。

「終わり。これで良いわ」

シアはそういうと身体を伸ばした。そして入口に向かって歩いて行く。魔王たちもシアに従って祈祷の間から出ていこうとした。すると、入口で黒づくめの集団とすれ違った。

「あら、シェリカじゃない。リーダーが言ってたんだけど最近ギルドを設立したんだって？」

集団の先頭に立っていた女が馴れ馴れしくシェリカに話しかけてきた。二十代くらいの金髪で、妖艶な雰囲気のある女だ。その女は晴れているのに、何故か長い傘を手に使っていた。

シェリカは彼女に話しかけられると露骨に顔をしかめた。そして、冷たく女をあしらおうとする。

「そうよ。それがどうかした？」

「いや、リーダーの誘いを断ってギルド作るなんて、やるなー思ってた聞いただけ」

「そう、ならもう行くわよ。私たちこれから忙しいんだから」

シェリカは感情を殺した声でそういうと、四人を連れて歩き去ろうとした。魔王たちも何だか良くわからないが、シェリカの機嫌が悪いようなので素直についていくことにする。

「いけ好かない女だったな。誰なんだあいつは？」

神殿を出て迷宮へと向かう途中。シェリカの隣に移動したサクラが尋ねた。するとシェリカはムスツと膨れた顔をして答える。

「銀の杯のアイリスよ。あいつとは銀の杯に入るか入らないかでずいぶん揉めたの」

「そうだったのか。だがそのアイリスという名前、どこかで聞き覚えがあるな」

サクラは首を捻り、顎に手を当てた。すると、話を聞いていたエルマがその疑問に答える。

「アイリスと言えはいつも武道大会で活躍してる女やろ。ほら、傘で戦うあれ」

「ああ、だから聞き覚えがあったのか」

「そういうことやね」

違和感のとれたサクラはポンと手をつき、豪快に笑った。それに応えてエルマもにっこりと微笑む。和やかな空気が辺りに満ちた。だが、ここで魔王が一つ疑問を感じた。

「……話に割り込んですまぬが傘でどうやって戦うのだ。傘は武器ではないと思うのだが」

「それがいろいろ上手いこと使うんや。叩いたり、突いたり、柄に仕込んである魔砲を撃ったり。そうそう、去年なんて……」

エルマは身振り手振りも交えて魔王にアイリスの戦い方を語った。魔王はその熱心な様子に、興味深そうに耳を傾ける。だがここで、シアが話を遮った。

「着いたわ。だから気持ちを切り替える」

シアが見慣れたモニュメントのような迷宮の入口を指差した。しかしエルマは気恥ずかしそうにシアを見て言った。

「今良いところなんや。もうちょつとだけ」

「ダメ」

シアはきっぱりと何のためらいもなく断言した。妥協するつもりは一切ないようだった。

「もう、けちやな。でもその通りか。よっしゃ、燃えてきたで！」

エルマの目に炎が燃えた。彼女はそのまま勢いに任せてみんなに円陣を組ませる。そして、高らかに宣言した。

「岩龍を倒すぞー！」

沈黙が訪れた。ここは人々の集まる広場の真ん中。四人は恥ずかしくて口をもぐもぐとさせるのが精一杯だった。

だが、ノリと笑いにうるさいエルマがそんな四人を許すはずがなかった。

「みんなノリ悪いなあ。ほらおーとかなんか言うてみ！」

「お、おー!!」

エルマの勢いに押された四人は、まごつきながらも掛け声をかけ

た。威勢の良い声が広場に響き、高い空に吸い込まれていく。

こうして五人は岩龍と戦う前に、わずかながら団結感を感じたのであった。

★★★★★★

迷宮第五十階層。そこには異様な緊迫感が充満していた。クリスタルで転移した途端に襲ってきた刺すような気配に、五人の緊張が張り詰める。

五人が忍び足で探索を始めると、すぐ目の前に圧倒的な存在感を放つ門があった。高さは人の背丈の五倍ほど、横幅はその高さの三分の二ほどの鋼鉄製の門だ。赤錆の浮いているその門の向こうからは、酔いそうなほどの魔力が漏れてきていた。

「この門の向こうに間違いなく岩龍がいるわね。みんな、準備はいい？」

「もちろん！」

四人の声が寸分変わらず重なった。シェリカは頷くと、ゆっくり門を押す。すると門はシェリカたちの訪れを待っていたかのように何の抵抗もなく開いた。そしてついに岩龍が姿を現す。

大地を思わせるごつごつとした身体に、光る牙。目は刃のように冷徹に獲物を射抜く。その山のような身体は、息をするたびに迷宮を僅かに震わせていた。

「ぐぎゃああああ!!」

小癩な侵入者にたいして、岩龍の悍ましい雄叫びが大気を切り裂き洞窟を壊さんばかりに轟き渡った。これは岩龍からの宣戦布告の合図であったのだ……。

第十九話 開戦、巨大龍（後書き）

いつのまにかこの小説が千ポイントを超えていました！
みなさんありがとうございます！
読者の

第二十話 侍に策あり

第二十話 侍に策あり

迷宮第五十階層に広がる大空間。そこで激戦の火蓋が切って落とされようとしていた。空気が痺れるように張り詰め、視線と視線が交錯する。

「しゃあああ！」

先に仕掛けたのは岩龍であった。長い前足を唸らせ、薙ぎ払う。膨大な質量に周囲の岩は吹き飛ばされ、粉塵が舞い上がった。

五人は後ろに跳んで回避し、体勢を立て直すと再び岩龍を睨みつけた。冷徹かつ鋭い眼差しが岩龍の動きを隈なく調べ尽くす。

「行くぞ！」

「ええ！」

粉塵で視界が無くなった岩龍に出来た僅かな隙。それをサクラとシェリカが見つけて切り込んでいった。二人は足音もなく走り、地面を蹴って飛び上がる。

二振りの刃が硬い皮膚に炸裂した。鋼と鋼をぶつかり合わせたような硬い音が耳を貫き、火花が舞い散る。

「ちいっ！」

「硬っ！」

二人の手に伝わった岩龍の皮膚の感触。それは鋼どころの騒ぎではなかった。ダイヤモンドの硬度と鋼の耐久性、その二つを合わせたような未知の感触であった。だが、二人は攻撃の手を緩めることはしなかった。

「ひょっとしてあの龍、オリハルチウムで出来てるんじゃないか……」

二人の猛攻に傷一つつかない皮膚、もとい装甲。それを離れて見ているエルマが呆然とつぶやいた。そのつぶやきに、魔王やシアの興味が集まる。

「オリハルチウム？　なんだそれは？」

「私も聞き覚えがないわ」

二人の質問に、エルマは少し考え込むような仕草をした。そして、言い淀みながらもゆっくり答える。

「オリハルチウムっていうのは神々の金属って呼ばれている金属や。すごく硬くてその上強靱！　ただ、大昔に製法が失われて今は残っていないはずなんやけど……」

エルマはそういうと心配そうに二人の方を見つめた。二人は岩龍の前足や長い尾を巧にかわしながら盛んに攻撃を続けている。だが、その刃はことごとく弾かれていた。

エルマはその様子に唇を噛み締めた。何とか加勢したかったが、

魔銃では二人に当たる危険が大き過ぎた。

「このままでは危険。なんとかならないの？」

シアが魔王をすぎるような目で見た。しかし、魔王は険しい顔をしてつぶやいただけであった。

「まだ手を出す時ではない」

「そんな……」

シアとエルマが絶望したかのような顔をした。魔王はそんな二人の顔を見ても何も言わなかった。

その時であった。龍が奇妙な動作を始めた。二人に対する一切の攻撃を止め、頭を高くかかげる。その口に光が満ち始めた。

「いかん！ 逃げるぞ！」

異変に気づいたサクラが絶叫した。そして全速力で駆け出す。それに僅かに遅れてシェリカも駆け出していく。

「ぐうおおお！」

咆哮とともに光が弾けた。蒼く輝く光が放たれ、津波のように二人に迫る。熱で岩は溶け、光で視界があやふやになった。もしまともに当たりでもしたら、二人は影すら残らないだろう。

「こっちや！ 速くう！」

「急いで！」

いち早く巨大な岩の陰へ避難したエルマやシアが、喉が裂けそうなほど叫んだ。二人はそれに応えてぐんぐん速度を上げ、光を振り切ろうとした。

サクラが光から逃げ切った。彼女は仲間たちに受け止められ、一息つく。それに続いてシェリカも仲間たちの隠れる岩陰へと飛び込もうとした。だが……

「ぐっ……はあ……」

シェリカの身体をを光が掠めた。鎧は焦げ、沸騰した血が爆発する。シェリカの滑らかな肌は吹っ飛び中の肉や骨を晒した。

「いやああ！」

シェリカの悲惨な状態に、エルマの悲鳴が響いた。目の前で人間の身体が一部とはいえ吹き飛んだのだ。血になれたシーカーといえど無理もなかった。

「落ち着いて。大丈夫、あれくらい治せる」

シアが叫び続けるエルマの肩を無理矢理に抑えつけ、口に手を当てた。そして、エルマが黙った後でシェリカの治療に取り掛かる。まずは彼女を横に寝かせ、傷口に手の平を押し当てた。

「イース・リウ・ハムナ・カタア……」

シアの口から呪文が紡がれ始めた。手の平の周りが淡く輝き、患

部が癒えていく。その後あっという間に傷はふさがり、シアはその場にへたり込んだ。

「ふう、はあ……治療完了よ……」

「シア、大丈夫!？」

いつも白いシアの顔が、紫に染まっていた。慌てて治療されたばかりのシェリカがシアを抱き起こす。シアの目は少し虚ろであった。

「魔力を消耗したのだな。仕方あるまい、余が行くでしょう」

魔王が岩陰から出て行こうとした。マントが擦れ、微かな音を立てる。その足取りはゆっくり重々しかった。しかし、そのマントの端をサクラの手が掴んだ。

「待ってくれないか」

魔王の足が止まった。彼は振り向き、真っすぐな瞳でサクラを見る。サクラの黒く濡れたような瞳は澄み渡っていた。

「私たちをもう少し戦わせてくれないか？」

「構わないが、何故なのだ？」

「ここで魔王に頼ったら、これからも頼りっぱなしになってしまう。仲間というのは支え合うもので依存するものではない」

サクラの口調にはどこか切迫感があった。強い魔王と弱い自分達。彼女なりに何か思うところがあるのだろう。

沈黙があった。辺りにはすでに獲物を焼き殺したと思っている岩龍の鼻息だけが聞こえていた。

「サクラの言う通りだわ。頼りっぱなしじゃ格好つかないもの」

シェリカの言葉が重く響いた。その声は小さかったが、心の琴線を震わせるものであった。

エルマとシアは、シェリカの言葉にただ黙って深く頷いた。二人にも、思い当たる節はあった。

「良かろう。こういうことは嫌いではない。だが勝算はあるのか？」

魔王は感心したような表情でそう言った。すると、サクラがゆっくりと首を縦に振る。

「一応は大丈夫だ。成功する可能性は低いが私に策がある」

サクラは冷静な口調で魔王に告げた。開き直ったという雰囲気でもなく、恐怖を感じているという雰囲気でもなく、ただ冷静に。だがその目はいつになく輝いていたのだった。

第二十話 侍に策あり（後書き）

サクラが活躍し過ぎかな……。もう少し控えめな方が良かったかもです。

第二十一話 緊迫の一分間

第二十一話 緊迫の一分間

迷宮の奥深くにて、サクラたち四人は額をつきあわせ話し合いをしていた。それを魔王は穏やかな表情をして見守っている。だがその瞳は絶えず、岩龍の姿を視界の端に捉えていた。

「一分、それだけ持たせれば良いんやな？」

エルマが声をひそめ、念を押すように言った。それにサクラは深く頷いて応える。

「そうだ。攻撃してくる岩龍を二人で何とか一分、持たせてくれ」

サクラの言葉は重く、抑揚がなかった。シェリカとエルマは眉間にしわを寄せ、緊張を隠せない。だがここで、シアがサクラに疑問を投げかけた。

「一分の間、隠れているのはダメなの？」

現在、岩龍はサクラたちを倒したと思って眠りにについている。一分たっても起きると思えない。しかしサクラは首を横に振った。

「ダメだ。私は一分の間に技を放つ準備をするのだが、その時に膨大な気が発生する。それに岩龍が気づかないとは思えない」

「なるほど。そういうことなのね」

納得したシアは口を閉じた。そしてシェリカとエルマに視線を送り、そのあと祈るように手を合わせる。

「神よ、三人にご加護を」

シアのらしくない行動に三人は固まった。だが、その心づかいは伝わったのか三人は岩龍を倒すべく行動を開始する。

「では……始めるぞ」

サクラは岩陰から出ていくと、目を固く閉じて精神を集中しはじめた。サクラの身体の輪郭が蜃気楼のように揺らぎ出し、気が満ちていく。

「ぐう……ぐぎゃああ！」

ただならぬ気配に岩龍が目を覚ました。寝ぼけ眼でサクラの姿を確認するや否や咆哮を上げ、地面を踏み鳴らしながら向かっていく。

「行くわよ！ 援護よろしく！」

「もちろん、どーんと任せてや！」

シェリカとエルマが岩陰から飛び出した。エルマはサクラと反対方向に走りながら魔銃を乱射、光が岩龍の顔で炸裂したちまちその注意を引き付ける。

「岩龍はん、こっちゃでー！」

「ぐぎゃああお！」

岩龍は迷宮を揺るがす叫びとともに、エルマに向かって突っ込んでいく。大木のような前足が振り上げられ、爪が冷たく光った。

「ぐごあああ！」

「はん、こっちにもいるのよ！」

いつのまにか岩龍の顔に上っていたシェリカがその巨大な眼に剣を突き立てた。眼に切っ先がめり込み、赤く充血していく。そのあまりの痛みに岩龍はエルマどころではなくなった。

岩龍は身体を丸め、洞窟の中をのたうちまわる。地面が揺れ、天井の岩が降ってきた。その大地震のような揺れに立っていることすら難しい。

「うわっ、わわわ！」

間一髪、岩龍の身体から飛び降りたシェリカはエルマの元へと駆け寄った。揺れでまともに歩けないなかを、何とか彼女に近づいていく。

「シェリカはん、大丈夫やったんやね！」

「もちろん、それよりサクラは？」

「見ての通り、大丈夫や」

エルマは顔をサクラの方向に向けた。シェリカもそれに続く。すると、さきほどと変わらないサクラの姿がそこにはあった。この大

揺れの中、地面に突き刺さっているかのように直立不動だ。

「ぎしゃああ！」

痛みから回復した岩龍が地を裂く雄叫びを上げた。その眼は怒りに染まり、裂けんばかりに見開かれている。その憎悪の眼差しの中にはシェリカとエルマがいた。

「これはやばいで！サクラはん、まだなんか？」

エルマがすぎるような調子で尋ねた。するとサクラは目を閉じたまま、かすれた声でつぶやく。

「まだだ……あと少し……」

「仕方ないわ、あと少し頑張るわよ！」

シェリカがそういうと、岩龍が攻撃を仕掛けてきた。前足が唸り、風を切る。シェリカとエルマはすばやく後ろに飛びのいた。前足が地面にあたり、轟音とともに砕けた岩が飛び散っていく。

「しゃあああ！」

岩龍は信じ難い速さで攻撃を繰り返した。前足、尻尾、顎の牙などあらゆるものが二人を引き裂かんと迫っていった。それらを二人がかわすたびに地面が揺れ動き、砂や岩が舞い上がる。

「は、速くなってるうう！」

シェリカが思わず叫んだ。なんと岩龍の攻撃速度は落ちないばかり

りか上がっていたのだ。岩龍の身体が風を切る音が、だんだんと洗練され硬質的になっていく。

すばやさには自信のある二人であったが、だんだんとかわすのが厳しくなってきた。余裕でかわせていた前足が、二人の長い髪を掠めていく。

「あかん、そろそろ……」

エルマの身体がいよいよ動かなくなってきた。だが、岩龍の体力に限界はないのか攻撃はなおも続いていく。そしてついに……

「くっ、痛あ……」

エルマの足がつった。普段は援護役で精密な動きはしても激しい動きはしない彼女。速い動きに筋肉が限界を超えた故であった。

エルマは痛みに負けず、足を引きずって何とか動こうとはした。しかしこの状況でそんなことは無意味。岩龍の爪が迫り、その柔らかい肉を裂こうとする。

「エルマあ！」

シェリカが手に持っていた剣を岩龍の顔に投げた。岩龍がほんの一瞬、動きを止める。その時であった。

「ぐあ？」

岩龍の背後で何かの気配が爆発した。岩龍は何事かと攻撃を中断して後ろを振り向く。

するとそこには鬼気迫る表情をしたサクラが立っていた。眼光は鋭く、気も溢れて空気を揺らめかせている。そしてその手には黄金色の炎のような刀が握られていた。

「準備完了、さあ行くぞ！ 裁きの星をその身に刻め、北神・星刻斬！」

気迫の籠った叫びとともに、黄金の輝きがいっそう明るさを増した。それは闇に沈む迷宮の洞窟を鮮明に照らし出す。そしてその後、サクラの身体が空に舞い上がったのだった。

第二十一話 緊迫の一分間（後書き）

最近なろうに新しいランキングが登場しましたね。作者も少し気になるですよ。ただ携帯からは見れなくて……。

もしもこの作品が載ってたりしたらテンション上がってシャ○も真っ青な速さで書くんだけどなあ……。

第二十二話 恐怖は二度あり！

第二十二話 恐怖は二度あり！

岩龍、それは迷宮第五十階層に巣くう巨大な龍である。その姿は威風堂々、これまであまたのシーカーを追いついてきた強者であった。だがそんな彼も今、倒れようとしていた。

「やあああ！」

サクラの叫びとともに刀が閃き、岩龍の身体に光の筋が刻まれていく。筋は交わり、やがて巨大な星となった。星は妖しく煌めき、閃光を走らす。

「ぎぎやあああ！」

岩龍はこれが最後とばかりに咆哮し、迷宮の洞窟を揺らした。だが、その身体に刻まれた星の輝きは増していくばかり。無駄な抵抗であった。

「……滅びよ」

地面に降り立ったサクラが刀を鞘に納めつぶやいた。その一瞬後、光の星が爆発して洞窟に光が満ちる。

その焼き尽くすかのような光に、すでに待避していた仲間たちも思わず目を閉じて叫んだ。

「サクラはんやり過ぎやで！」

「暑っ！」

「ほう……これはなかなか大したものだ」

爆発は辺りを飲み込んだ後、ようやく収まった。そこには岩龍の姿はすでに無く、代わりにその身体の破片だけが飛び散っていた。

「ふう……にやんとか倒せたぞ」

岩龍の死骸を背にしてサクラが仲間たちの元へと帰ってきた。その足はふらふらで、舌すら満足に使えていない。仲間たちはそんな彼女を優しく抱き留めて、ねぎらいの言葉をかける。

「サクラはん、助かったで！ みーんなあんたのおかげや」

「私もあなたには頭が上がらないわね」

「私も同感」

サクラは仲間たちの優しい言葉に目を潤ませた。感極まって今にも泣き出しそうだ。その時、魔王が追い打ちをかけるように小さくつぶやいた。

「言っただけのことはやった。ゆっくりと休むがよい」

サクラの涙腺に限界が来た。彼女は頬を濡らしながら、仲間たちに感謝の言葉を述べる。その顔はとても晴れやかであった。

「あっ、ありがとうみんなにゃ……私はうれしいぞ」

サクラのネコのような言葉を聞き、みんなは盛大に笑った。普段、冷静な印象が強いサクラなだけにとても笑えたのだ。

そんな風になっていると、シアがそわそわとし始めた。彼女はみんなを見回すと、こっそり岩の陰から出ていく。抜き足差し足、忍び足というような感じで。その手にはひよこの財布が抱えられていた。

「魔力珠を回収……」

シアはスウツと岩龍のいた位置まで行くと、目を皿のようにして魔力珠を探し始めた。魔力珠をネコババして財布にしまう気満々だ。ところが、そこには血のように紅く奇妙な文字が刻まれた白い骨しかなかった。

「これが岩龍の魔力珠？　骨にしか見えないわ……」

シアはその妙な骨を手にとると顔をしかめた。魔力珠というのはその名前の通り球体だ。こんな骨のような形をしたものなどシアには見たことも聞いたこともない。

だが魔力珠らしきものはこれの他にはない。なのでシアはしばらくその場でこの骨を持って帰るかどうか考え込む。

「さっ、もう今日は帰ってパーティーでもしましょ！　あれ……シアは？」

シアが考え込んでいると、シェリカがシアのいないことに気づいた。彼女に続いて他の三人もシアを探し始める。すると、魔王がすぐにシアの姿を見つけた。

「何をやっておるのだ。帰るぞ」

「ちょっと待って」

シアはとりあえず骨を財布に押し込んだ。太ったひよこがさらにはち切れそうになる。魔王はそのひよこの財布を見て眉をひそめた。

「シア、今それに何か入れなかったか？」

「……別に」

「いや、何かを入れたはずだ。妙な魔力を感じる」

シアは沈黙した。ただじっとしているだけだ。すると、ひよこの財布が突然弾けた。金貨が飛び散り、シアの顔が青ざめる。

「ひゃあ！」

「いかん！」

魔王はシアの元へと駆け寄り、その身体を抱き抱えた。そして急いでその場から逃げていく。財布を弾き飛ばした骨が宙に浮かび上がった。骨に刻まれている紅い文字が生きているかのようにのたうち、揺らめく。

「あれは一体どないしたんや！」

「何なのよあれ！」

洞窟の奥に移動していたシェリカとエルマ、そしてその手に抱えられたサクラが戻ってきた。三人はそれぞれ宙に浮く骨に視線を向けている。

「あれはおそらく呪術に使う核だ。あの様子からすると死霊術だろうな」

魔王の一言に、四人は凍りついた。死霊術というのは、死体を蘇生させて操る呪術のことである。これが使われているということは、岩龍はすでに死んでおりその死体を何者かに操られていたということだ。しかも厄介なことに、死霊術というのは核を破壊しない限り解除されない。つまり、核を破壊しなければ死体はいくらでも再生するのだ。

「死霊術ですってえ！ 誰がそんなことを！」

「わからぬが恐るべき術士であろうな。あれだけ完璧に龍を蘇生するとはそもそも人間にできるかどうかすら怪しい。……まあ今はそんなことは良い。あれを何とかせねば」

魔王はそういうと鋭い視線で骨の方向を見た。骨からはすでに無数の血管が網の目のように伸びている。それらは一定の感覚で脈打ち、その周りには肉が再生し始めていた。

「くう……どうするのよ！ サクラはもう戦えないし、私たちだけじゃ火力不足よ」

絶望に染まったシェリカの声が洞窟に響いた。その叫びに他の仲間たちも顔を俯けて何も言えない。魔王もまた、複雑な顔をして黙っていた。

そうしているうちに岩龍はどんどん再生していった。骨格や筋肉のほとんどが再生され、辺りを血に濡らす。そしてその表面をめがけて飛び散ったオリハルチウムのかけらが張り付いていった。

「ぐおおお！」

八割がた再生した岩龍が空気を貫くような雄叫びを上げた。咆哮が天井を轟かせ、地面が震える。それを聞いたシェリカたちは恐怖におののいた。その顔にはまったく覇気はない。だが、魔王だけはそれを聞いて覚悟を決めたような引き締まった顔になった。

「サクラには悪いが……。どうやら余が戦うべき時が来たようだ」

第二十三話 魔王の本気（前書き）

遅くなりました！

ごめんなさい！

第二十三話 魔王の本気

第二十三話 魔王の本気

「くぎゃああ！」

完全復活し、けたたまし雄叫びを上げる岩龍。魔王はその前に悠然と立ち塞がり、刃のような目つきでその姿を見据える。

「行くぞ！ みんな下がっている！」

「わかったわ！ ほら、みんな下がるわよ！」

三人は岩陰から素早く飛び出して、さらに後ろの大岩に隠れた。魔王はそれを後ろ目で確認すると、杖を身体の前に構えた。緊迫した空気がにわかに張り詰め、刹那の沈黙が訪れる。

「ふぬっ！」

魔王の姿が突風とともに消えた。彼のいた場所には窪んだ地面だけが残されている。だが次の瞬間、岩龍の顔の前に魔王はその姿を現した。

「ダークアロー！」

「きしゃあああ！」

魔王の杖から周囲の闇よりなおも暗い闇の矢が飛び出した。無数の矢は岩龍の顔を穿ち、岩龍は悲鳴を轟かせる。洞窟が震え、岩が

ぽろぽろと落ちた。

だが魔王は岩龍の悲鳴になど頓着しなかった。彼は魔法の反動で洞窟の中を高く高く舞い上がっていく。そして、洞窟の天井近くに差し掛かると天井を強烈に蹴った。天井が大きく窪み、魔王が砲弾のような速度で飛び出す。その速さたるや、音にも迫ろうかというほどだ。

「ぐうお……」

魔王の蹴りが岩龍の首元に炸裂した。岩龍の巨体が揺らぎ、崩れる。ぐらぐらと洞窟が揺れ、天井から岩がいくつも崩れ落ちてきた。さらに魔王は岩龍に次々と技を繰り出し、再び立ち上がる隙を与えない。だが、その攻撃のせいでいよいよ洞窟内は危ない状況になってきた。天井から細かい石が降り注ぎ、ときどき大人より大きな石が落下する。

魔王はそれでも別に良かった。岩が当たるぐらい大したことではない。だが、この洞窟には魔王と岩龍以外にもあと四人いた。シェリカたちだ。

「うわああ！　こりゃあかん、避難するで！」

「避難するってどこへよ！」

「えっと……」

「あそここの門を越えたところならたぶん安全」

シアが洞窟の入口の門を指差した。確かに、門の向こうでは岩は

降っていない。エルマとシェリカはともに頷き、サクラに肩を貸して避難を開始した。その間、魔王は攻撃を一時中断して、四人の様子を見守った。幸いにも岩龍は気を失いかけていた。

しばらくして、鳴り響く金属音。入口の門が閉められた。魔王はそれを確認すると、岩龍に不適に笑いかける。そのとき岩龍は、半気絶状態から脱しつつあった。

「戦闘再開だ」

「ぐあおお!!」

戦う者の心は通じ合うのだろうか。魔王の言葉に岩龍は咆哮を持つて答えた。そして、その口に膨大な魔力を蓄え始める。

「ブレスか……しかもかなり魔力を込めているようだ。……かわせぬな、守護陣一式!」

魔王は杖で手早く地面に魔法陣を描き、魔力を込めた。オレンジ色の光の壁が魔王を包み込む。ちょうどその時、岩龍の方も魔力を蓄え終えた。口から青い魔力の炎が放たれる。空気を焦がし、岩を溶かし、炎は魔王へと迫っていく。しかし、魔王の方に一切の動揺はなかった。眉一つ動かさぬまま魔法陣ごと炎に包まれていく。

洞窟内が火の海になったところでブレスは収まった。岩龍は満足したのか目を細める。だがここで、彼にとって想定外のこと起きた。何かが火の海から跳んだのだ。その出来事に岩龍は開けていた口を閉じることもできない。

「油断したな……。ハイプローション!」

無防備な岩龍の口から閃光がほとばしった。洞窟の中が一瞬、白くなるほどの光だ。しかもそこはオリハルチウムの外殻に守られていない岩龍の最大の弱点であった。それゆえに、岩龍の頭は内側から粉々に吹き飛ばされてしまう。

「よし、後は……」

魔王は呪術核を探し始めた。目を閉じて微弱な魔力の流れを探っていく。精神が無に達して、極限まで感覚が鋭敏となる。その結果、魔王はすぐにそれらしき魔力の塊を見つけた。

「これか……うむ、間違いない」

それは肉に埋もれて血で濡れていたが白い骨に紅く刻まれた文字、間違いなく呪術核であった。魔王はそれを肉の塊から引っ張り出すと、手で握り潰す。乾いた音がして、骨は粉と化した。

「ほう、これは……」

岩龍の身体が光となっていた。巨大な骸が淡い燐光となり、空中へと消えていく。光の花が咲き乱れたようになって、あたりは一面彩色の海に飲まれていった。

「良くやったわね魔王……」

「うぬ？ この気配は混沌神か」

景色に見惚れていた魔王の頭の中に声が聞こえた。合唱のようないくつかの声が混じったような声である。魔王はその声の正体がす

ぐに混沌神だとわかった。

「何のようだ？」

「そう怖い声をださないでよ。あなたと仲間に贈り物があるの」

「贈り物？」

「そうよ、だから他の女の子たちも連れてきて」

「わかった、連れてこよう」

魔王は疑わしげな顔をしながらも、鉄の門をこじ開け避難していたシェリカたちの元へ移動した。すると、魔王の姿を見つけたシェリカたちが駆け寄っていく。

「魔王！ あんた大丈夫なの！？」

「大丈夫だ。どこも怪我はしておらん」

「本当に大丈夫なんか！？ 無理したらあかんで！」

「大丈夫だ。心配しなくてよい」

元気そうな魔王の言葉に四人はほっと一息ついた。四人とも、門の向こうの魔王が心配で仕方なかったのだ。険しい雰囲気が一瞬に緩み、穏やかになる。

「今度こそ大丈夫なようね。さあ、帰りましょう」

「ちょっと待て」

シェリカがクリスタルの方向に向かって歩き始めた。だがそれを魔王が呼び止める。シェリカは妙な顔をして後ろを振り向いた。

「まだ何かあるの？　もしかして……また復活したとか……」

「それは大丈夫だ。ただ混沌神がシェリカたちを呼んでいてな。ついてきてくれ」

ここでシアの顔つきが変わった。目を大きく見開き、驚いたような顔となる。その目はどこか恐怖を感じているようであった。

「あの混沌神さまが……。何があるというの？」

「シア、どうしたのだ」

「いいえ、何でもないわ。行きましょう」

シアはそう言うと、真っ先に門をくぐって行った。その足はどこか焦っているようである。魔王たちはシアが何を怖がっているのかわからなかったが、どこかおそろるおそろる門をくぐって行った。

第二十四話 クラスアップ（前書き）

※残酷な描写あります！ 注意して下さい！

第二十四話 クラスアップ

第二十四話 クラスアップ

迷宮第五十階層の大空間。その中に、シアを先頭にして魔王たちはどこか重たい足取りで入った。すると、その闇の奥で混沌神が岩に腰掛け泰然とした態度で待ち構えていた。この間、魔王が神殿で対面した時とは違ってはつきりとした美しい女の姿をしている。

「あなたが混沌神様でしょうか」

シアがいつになく恭しく頭を垂れた。さすがに彼女も神官なので、神に対しては礼儀正しいようだ。だが、混沌神はそんなシアに実に気安い態度で応えた。

「ええ、そうよ。いかにも私が混沌神、ヘカテ・メンリよ。で、あなたは誰だっけ？」

「……シアでございます。それで今日はどのような啓示がありますのでしょうか？　混沌神様が神殿以外に降臨されたのは初めてのことですが……」

シアが不安そうな顔をした。混沌神はその名前の通り破壊と混沌を司る神だ。しかもその力は全知全能に近いとまでされている。そのような存在がいきなり降臨したのだ、不安になるのも無理はない。

しかし、混沌神はにやりと目を細めるとシアの不安を見事に裏切って見せた。

「今日はねえ、あなたたちをクラスアップしてあげに来たの。あとついでに魔王にプレゼントを届けに。それだけよ」

「ク、クラスアップですってえ！」

混沌神の言葉にシェリカが叫んだ。その目は限界まで開かれて驚愕を表している。他のエルマとサクラも、そこまではいかなくとも驚いた顔をしていた。

「クラスアップと言えば己の力を最大限引き出せる『職業』に就ける儀式。だけどその方法は五百年ほど前から絶えていると聞いたことがあります。もしかしてそれができるのですか!？」

シェリカは早口にまくしたてた。彼女は興奮していて、目をきらきらと輝かせている。その様子に混沌神はどこか嬉しそうに頬を緩めた。

「良く知っているわね、だいたいその通りよ」

「そうですか！ やったあ！」

シェリカは嬉しさのあまりその場で跳び上がった。さらに拳も突き上げて高らかに叫ぶ。しかし、シアはその様子に若干冷めた視線を送った。そして混沌神の方を改めて見つめる。

「クラスアップしていただくことはありがたいです。しかし、なぜ今なのですか？」

「ああ、それはあなたたちが岩龍を倒したからよ。あの龍はもともとクラスアップへの試練だったからね」

「そうなのですか。ではなぜ……。」

「じゃあ早速クラスアップしましょう」

シアはなぜ岩龍がアンデッドと化していたのかを尋ねようとしたが、混沌神はその質問を遮った。その時、混沌神の目には妙なものが現れてとれたが、シアやシェリカたちにはその理由を聞くことはできなかった。

★★★★★★

迷宮都市の北西に存在する白亜の大建築。月光に照らされ淡く輝くその奥に、ユリアスは座っていた。その目の前の格調高い木目のテーブルには、鈍く光る杯が置いてある。杯にはねっとりとした血のようなものが満たされていた。

「ふうむ……。岩龍さんはやられてしまったようですねえ」

ユリアスは杯の水面を見て、ふうとため息をついた。そして、椅子から立ち上がり部屋を出ていく。廊下のシャンデリアのまばゆい光を抜けて、彼女は一つの部屋へと足を踏み入れた。

部屋にはすでに六人の人間が集まっていた。彼らはユリアスの姿を確認すると、一斉に立ち上がり額に手を当てる。

「杯に光あれ」

「光あれ」

ユリアスの号令で六人は一斉に叫んだ。そしてそのあと一糸乱れることなく着席をする。ユリアスはそれを見届けると革張りの豪華な椅子にゆったりと座った。

「こんばんは、みなさん。本来なら今夜は嬉しいお知らせをする予定でしたが……。少々想定外のことが起きました」

部屋の中がにわかにざわめいた。六人は顔を見合わせ、隣同士でこそそそと話を始める。その様子にユリアスは眉をひそめると、手をパンと叩いた。すると水を打たれたように六人は沈黙してユリアスに注目した。

「まったく。騒がしいのは嫌いですよ。さて……今回の岩龍を利用する案を考えたのはどこのどなたでしたか？」

鋭い視線が六人の間を走り抜けた。六人はそれぞれ背筋を凍らせて身体を固める。そして、一人の男がゆっくりと手をあげた。黒髪の小柄で控えめな顔立ちの男だ。

「キーンさんでしたか。私はおバカな人の名前はすぐに忘れてしまうのであやうく忘れるところでしたよ。ふむ……言いたいことはわかりますね？」

「はい……」

「良いお返事です。さあ、その場にお立ちなさい」

キーンは重たい腰を上げると、ゆらりと幽鬼のように立ち上がった。その顔は蒼白で唇は紫に染まっている。それに対してユリアスはいらだたしげな様子で立ち上がると、腰の剣に手をかけた。

「一撃で決めますよ」

ユリアスが剣を抜き放った。磨き抜かれた鋼の白い光がきらめき、闇を切り裂く。風が唸り、刃がキーンの身体を断とうと迫る。しかし……。

「気が変わりました」

ユリアスはわずかに飽きたような目をしていった。刃が鼻先まで迫っていたキーンはほっと息をつく。そして彼はゆらゆらと震える足で席へと戻っていった。だが彼が椅子に腰を落ち着けようとした時、ユリアスがおぞましい考えを思いついた。

「そうだ！ ふふ、面白いことを思いつきましたよ」

残忍で冷酷な眼差しが再びキーンに向けられた。キーンは黒い絶望に叩き落とされて、呼吸すらできない。そうして彼が口をパクパクとさせていると、ユリアスの口からおそろるおそろる言葉が告げられた。

「私は昔からローストビーフが好きなのですが……今回はあなたにローストビーフになってもらいましょう。そうですね、両手両足を取って蠟燭でじっくり中まで火を通しましょうか。そうすればおいしくできるはずです。あっそうそう、作ってる最中に腐ったら困りますからね。出来上がるぎりぎりまで死なないようにしておかないと」

「いやだ！ いやだああ！」

キーンは絶叫しながら逃げ出した。すかさず隣の男が暴れる彼を取り押さえ、別室へと連行していく。部屋にはユリアスと青い顔をして吐き気をこらえる四人が残された。

「アイリスさん」

「はっ、はい！」

「もうそろそろ武道大会の時期でしたね」

「そうですユリアス様！」

「ふむ、これまであなたにはうちの代表として出てもらっていました。ですので例年通りお願いしますよ。ただ、今年はあるシェリカのギルドからも誰か出場するでしょう。もしその人に負けたら……」

ユリアスはそこで言葉を打ち切った。そして、椅子から立ち上がり窓の方へと近づいていく。月明かりに照らされたその姿は凄惨な美しさであった。

硬質的な音が鳴り響いた。砕けた窓が地面に向かって落下していく。無数のかけらはやがて光の粒のようになり、悲しい光を辺りに投げかけた。

窓を砕いたユリアスはアイリスの方を向くとにやりと口を歪めた。そして優しくささやくように言った。

「こうなってもらいますよ」

第二十五話 新たな力

静けさ漂う大空間。暗く、闇に閉ざされたその奥で今まさにクラスアップの儀式が始まろうとしていた。

「それではクラスアップの儀式を始めるわ。まずはその紅い髪の毛から」

「はい！」

シェリカは混沌神の前まで強張った足取りで歩いていった。すると混沌神は彼女の額に手を当てて何事かぶつぶつとつぶやき出す。

「剣術がメインみたいね……。でも魔力もそれなりにあるし、使わないのはもったいないわ……」

混沌神はしばらく考え込んだ。その様子をシェリカは緊張しながら見守る。そしてその額から汗が落ちた時、ようやく混沌神はシェリカの職業を決めた。

「……決めた、あなたの職業は『魔法戦士』よ！それで構わないかしら？」

「もちろんです！」

「よし、なら早速クラスアップしましょう……」

混沌神はシェリカの肩に手を乗せると、目を閉じて呪文を唱え始めた。七色の光がシェリカを中心に渦巻き、その身体に吸い込まれ

ていく。その時のシェリカは心地好いのか、風呂にでも入っているような顔をしていた。

「……これでおしまいっと。これではあなたは魔法戦士よ。新たに魔法剣という技が使えるようになってるから、使ってみなさい」

「ありがとうございました！」

シェリカはぺこっと頭を下げると、後ろに戻っていった。それを混沌神は微笑みながら見送る。そしてまた次の者を呼んだ。

「次はその着物の娘。こっちに来なさい」

「次は私か。はい、いま参ります」

サクラが前に出て行くと、シェリカの時と同じように儀式が行われた。その結果、彼女は『侍』という職業に就く。これは刀を使って戦うと能力が上がるという職業であった。

★★★★★★

その後も特に何事もなく儀式は進行していった。シアもエルマも無事にそれぞれ『僧侶』と『銃士』という職業につく。

そしていよいよ最後、魔王の順番がまわってきた。彼はシェリカたちの暖かい視線に見送られながら混沌神のもとへと歩み寄る。すると混沌神は待ってましたと言わんばかりの顔をした。

「魔王、あなたの職はすでに決まっているわ」

「ほう……。いったい何なのだ？」

「混沌魔法士よ」

「混沌魔法士？ 聞いたことがないな」

魔王はわずかに眉を寄せた。長く生きてきた彼にもそんな職業、聞いたことがなかったのだ。すると混沌神は両手から色とりどりの魔力の球を出して言う。

「混沌魔法士というのは、複数の属性の魔法を重ねて使える魔法使いのことよ。まあちょっと見てて」

混沌神はそういうと手の平を前に突き出した。するとさきほど出した魔力球が集まり重なっていく。やがてそれは虹色にきらめく光の塊となった。

「この世を支えし七つのエレメントよ、我が手に集まり力を示せ！
アブソリュート・ブレイク！！」

光の球が勢いよく放たれた。迷宮の闇を貫き、一条の白線を引く。そして、光の塊は岩壁に突き刺さり目を覆わんばかりの爆発を巻き起こした。

「すっ、すごい……」

「迷宮に穴が……」

「強烈すぎやで」

爆発の後に残されていたのは、一直線に続く長い長いトンネルであつた。一体どこまで続いているのかその果てを見ることができない。シェリカたちはそれを覗き込んで、にわかに顔を青くした。

その一方、混沌神はしれつとした顔をしていた。さらに魔王もにやりと口もとを緩める。彼の表情はどこか楽しそうですらあつた。

「面白い能力だ」

「でしょう？　じゃあ早速クラスアップするわね」

混沌神はさきほどと同じように魔王の肩に手を置き、呪文を唱えた。するとどこからか紫の靄が沸き起こり魔王を包む。だがそれはどこか暖かで心地好いものであつた。

「これで終了。じゃあね。……ああいけない、忘れるとこだったわ」

混沌神はふと気がついたように袖の隙間を漁った。するとどこに入っていたのだろう、長い銀色の槍が出てくる。その槍はところどころ赤錆が浮いていて、お世辞にも綺麗なものではなかった。だがそれを見た瞬間、魔王の目の色が変わる。

「……ずいぶんと物騒な物を持っているのだな」

「まあね。で、これをあなたに預かって欲しいのよ」

「これを余にだと？」

魔王は鋭い目を混沌神に向けた。混沌神はいつもの飄々とした態度は崩さない。だがしかし、その目は澄み切っていて曇るところが

なかった。

「何か仔細があるようだが良いだろう。この槍、しばらく預からせてもらう」

「ありがと。それじゃあ今度こそさよなら」

混沌神は手を微笑みながら手を振った。その姿がだんだんと薄らいでいき、やがて神聖な気配だけを残して消える。魔王はそれを、割合真剣な顔で見送った。

「さて……帰るか」

「そうね、帰りしよう」

魔王は槍を手品のようにマントの中へしまうと、ゆっくり歩き始めた。それにシェリカたちも続いていく。

こうして魔王たちは迷宮から帰還し、家へと帰ったのであった。

第二十五話 新たな力（後書き）

次回からいよいよ武道大会編に突入するのですが……。実はまだ決勝に出場する選手が決まっておりません（汗）

一応、候補は……

残像を使いこなす俊足の剣士

扇から炎、雷、暴風を出して戦う女武道家

超音波で敵に攻撃する音楽家

仮面を取り替えると性格の変わる仮面の魔法使い

……の四名と魔王、アイリスまでは決まっています。ですが予定の人数まであと二名足りません（涙）。もし読者の皆さんに良いアイデアがありましたらお願いします。

第二十六話 武道大会前日

未だ太陽も昇らぬ早朝。霧の煙るシェリカの屋敷の庭で朝からシェリカたちが訓練に勤しんでいた。

「やああ！　せいっ！　とう！」

サクラは一段と冴え渡る剣技を見せ、霧を裂いていた。白刃が薄明かりに煌めき、風を切る音が響いている。その額からは汗が噴き出しており、彼女はそれを時おり手ぬぐいで拭っていた。

そのさらに奥では、シェリカが剣を睨みつけていた。眉間にしわを寄せて目が裂けそうなほどだ。そうしてシェリカが剣を睨みつけていると、剣の表面がわずかに輝き始めた。そして次の瞬間、剣が真っ赤に燃える。

「よしっ、成功！」

シェリカは燃える剣を見て、ガッツポーズをした。その様子を後ろから魔王とエルマとシアが見守っていた。その三人の表情は感心七割、呆れ八割といったところだった。

「二人ともお天道さんも昇る前からよう頑張るなあ……」

「そうね、こんな朝早くから叫ばれたら迷惑だわ……」

エルマとシアはそう眠たそうに言うと、一緒に大あくびをした。まだ二人とも起きたばかりで、パジャマを着ている。二人とも朝には基本的に弱いのだ。

「まあそういうでない。二人とも頑張っているのだからな」

「せやかて……二人とも明日の大会には出んのやで」

エルマはたしなめるな顔をした魔王に口を尖らせた。大会参加はギルド単位で、一つのギルドにつき一人参加できる。なので、魔王たちのギルドからは魔王が参加することがすでに決定していたのだ。

「参加せずとも燃えてくるのが武人というものであろう」

「そうかいな。うちにはイマイチわからん世界やわ」

「心配せずともエルマやシアにもそのうちわかるだろう」

「……」

「……………」

微妙な空気が辺りを漂った。二人とも、体育会系はあまり好きではないようである。特にシアの方は『サクラみたいなおバカさんにはなりたくないわ』と延々とつぶやいていた。

「さてと、そろそろ朝ご飯の時間だな。シェリカ、朝ご飯にするぞ！」

「わかったわ、準備するから待って！」

シェリカは訓練用の剣を庭にある倉庫にしまうと、台所に向かって走っていった。一方サクラは手ぬぐいを肩にかけて、魔王たちの

方に歩いていく。

「朝から熱心だな」

「まあそうだ。……私はいつか魔王に追いつきたいからな」

「そうか、なら励むことだな」

「くっ、いつか魔王に負けたと言わせてやるんだからな！」

サクラは手ぬぐいをエルマに預けると、どしどしと音を立てながら屋敷の中へと入っていった。エルマと魔王はそれを呆然とした顔で見送る。だが、シアだけはにやりと笑った。

「くすくす……。サクラは不器用なのね……」

「どこが不器用なのだ？」

「うちも気になるで」

「ふふふ……。二人とも鈍いのね。なら私が教えて上げる……」

シアは手招きして二人を近くに寄せると、手を筒のようにして口につけた。二人は腰を屈めて耳をシアの方に向ける。だがその時、三人の会話を邪魔するかのようにシェリカの声が聞こえた。

「三人ともご飯にするわよ！ 早く来なさい！」

「ご飯だわ。また気が向いたらしゃべってあげる」

シアは二人から離れるとさっさと歩いて行ってしまった。エルマと魔王は互いに顔を見合わせる。その時、エルマのお腹が鳴った。

「あはは……うちらも飯にしようか」

「そうだな」

こうして魔王とエルマも朝食へと向かったのであった。

★★★★★★

シェリカの屋敷の食堂で五人は朝食を食べていた。白いテーブルクロスのかけられた長いテーブルにつき、それぞれ並べられた料理に思い思いに手を出している。

だがそこで、シェリカはミルクを飲み干すと、不意に手を止めた。そして他の四人を見回して言う。

「今日はこれから大会の受付に出かけるわよ。夕方までだから早めに済ませなきゃ」

「そうね、それに浮上式も見たいわ」

「浮上式？」

サクラがどこか抜けたような声を出した。同様に、魔王もまたきょとんとした顔をしている。迷宮都市に来てまだ半年ほどのサクラと魔王には『浮上式』とは何のことかよくわからなかったのだ。

「ああ、浮上式っていうのはな……」

「待つてエルマ。ここで答えを言ったら楽しみがないじゃない」

「そろそやや。そういうことだから二人とも、見るまでのお楽しみや」

エルマの言葉にシェリカたち三人はにこにこと互いに笑いあった。サクラと魔王は何があるのだろうかと思像して頭を捻る。

その後、食事を終えた魔王たちは後片付けを済ませて、武道大会の会場へと出かけた。会場はシェリカの屋敷から北東に十分ほど歩いた位置にある闘技場である。五人はいつになく込み合う人の波を掻き分けて、無事にその前に到着した。

「なかなか大きいな」

闘技場は巨大な円形建築であった。茶色の石で積み上げられた、見上げると首が痛くなりそうな壁が魔王たちの視界一杯に広がっている。魔王は初めて見るその大きさに少々驚いたようだった。

「驚いてるみたいね。でもまだ早いわよ。ほら、そろそろ浮上式が始まるわ」

シェリカが込み合う人々の先を指差した。その指の先には黒服を着た男が、拡声用の魔法具らしきものを手にして立っていた。

「あゝ、えゝただいまより第二十三回最強ギルド決定戦の浮上式を行います！ それでは皆さんご覧下さい！」

黒服の男は高らかに宣言すると、右手を勢いよく闘技場の方へと

向けた。すると、何かが軋むような音が響き渡って地面が揺れ始めた。

「じっ、地震だ！ 机の下に隠れなくては！」

「おバカ。あれを良く見て」

シアに冷やかな口調で言われたサクラは、シアの指差した方向を見た。すると、そこには驚くべき光景が広がっていた。

「うっ、浮いてるのか！！」

揺れで発生した膨大な砂埃の向こうに見える闘技場の影。それは何故か地面とつながっていないように見えた。しかも、それはだんだんと上昇しているようにも見えた……。

第二十六話 武道大会前日（後書き）

え〜と、この間募集しましたキャラなのですが、白銀さまの戦闘狂とk y o j uさまの忍を採用いたしました！

あとは、キャラの性格としまして原翔さまの偽勇者も採用させていただきます。

皆さまのご協力にただただ感謝です！

※お知らせ

突然ですがこの度、迷宮の魔王さまを改訂版と致しましてまた新たに投稿させていただくことといたしました。改訂の内容は主に不足していた描写の追加、急展開すぎる部分の修正です。

改訂の理由といたしましては前々から構成が悪いと作者自身も思っておりましてところに、そのような点を指摘する感想をいただいたのが理由です。

尚、改訂版で設定の大幅改変などは行わない予定です。また、この小説もお気に入りが無くなるまでは削除はせずに残しておきますのでご安心下さい。

これからという部分で改訂をすることになってしまい、もうしわけありません。これもひとえに私の力不足が招いたことです。できるだけ早く現在までの部分の改訂版を投稿し終え、そこからまた新たな話を書いていきます。なのでまた読んでいただけますと幸いです。

追伸

改訂版の題名はそのまま『迷宮の魔王さま 改訂版』として投稿しました。検索していただければ見つかるかと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1524p/>

迷宮の魔王さま

2011年1月22日23時04分発行